辺境から中心を撃つ礫（つぶて）

――アフガニスタン難民の生存を支援する中村哲医師とペシャワール会の実践――

清水　展

一　はじめに

本稿は、福岡に本部をおき、パキスタン北西辺境州のペシャワールを拠点として、アフガニスタンの病人と貧者や弱者、難民たちのために、あるいは彼らとともに、二〇年余にわたって医療や水利・農業支援の活動を続けている中村哲医師と彼を支えるペシャワール会の活動の意義、および、それを支えつつ同時にその活動を通して育くまれてきた思想について考察しようとするものである。[1]

たまたま縁あって、私が九州大学教養部に赴任した一九八五年四月は、中村医師がＪＯＣＳ（日本キリスト教海外医療協力会）からペシャワール・ミッション病院に派遣されてライの医療活動を始められてから、ちょうど一年後であった。やがて中村医師とペシャワール会のことを知るにつれて、彼と彼を支える会員の活動に深い敬意を抱くようになった。二一年あまり過ごしてきた福岡市の市民として、ホークス球団の活躍が私の自慢であり、ペシャワール会が福岡にあることが私の誇りである。

しかも中村氏の活動と折に触れた発言は、人類学者としての私には、自らが範を示しつつ「いったい、お前は何をしているのか？」と直接に問いかけてくるように感じられた。さらには、現代日本において、ＮＰＯ・ＮＧＯや政府による国際協力の真に望ましいあり方を考える上でも、多くのヒントや示唆を与えてくれている。しかしなが

ら、新聞や雑誌による活動の紹介は膨大であるが、その実践の意義や思想を正面から取り上げた論考は案外と少ない。

数少ない一人が国際関係論を専門とする初瀬龍平であり、「グローバル化時代のアジア主義――中村哲の場合――」と題する論文（二〇〇五）で、「中村の心情と信念を明らかにし、さらに活動の意義付けの枠組みとなる彼の世界認識を」詳細に「検証し」ている。結論として、すでに題名が示しているように、「彼が自己の歴史的存在を確認する認識の枠組みとして、アジア主義的な世界認識を用いて」おり、これが「『アジアで共に生きる』という現地活動に具現されている、とみるべきである」と述べている（*ibid.*:105）。さらに初瀬は、アジア主義について、①一国的（national）側面、②国家間的（international）側面、③トランズナショナル的（transnational）側面が絡んでおり、戦前日本の大アジア主義では、三者の絡み合いの上に、一国的側面がその中核にあったことを確認した後、現代のグローバリズム時代では、むしろ三つの側面は分離傾向にあり、「中村のアジア主義は、トランズナショナルなアジア主義」と規定している（*ibid.*:105-106）。

卒直に言って、中村が自身の活動と存在をアジア主義的な世界認識を用いているとの指摘に、私は同意しかねる。まず、初瀬自身が、上記の文章のすぐ後に続いて、「それが従来の理解では、完全なアジア主義とはいえないことも確認した」との留保をつけている。完全といえないのならば、不完全な、つまりどこかに欠損欠如の部分を抱えた、発展途上ではあるが未成熟なアジア主義なのか。あるいは従来とはまったく別の、新しいアジア主義として捉えるべきなのか。それにしては、そもそもトランズナショナルなアジア主義という概念があいまいである。確かに、中村は、福岡に生まれ育ち、火野葦平を叔父に持ち深く敬愛していることから、彼の言動をもとに玄洋社の水脈につながるアジア主義を言い立てることは容易かもしれない。しかし、中村自身が、自からの活動や信念や歴史的存在を確認したり、認識したりする枠組みとして、アジア主義を明言しているわけではない。当人が名乗りもせず認めてもいないのに、「～主義（者）」と示唆することは、ひょっとして、とんでもない傲慢と不遜かもしれない。[2]

中村にとって、主義や理念は、人の目を曇らせて現実を見させず、実情と乖離した行動を強いて、結果として進むべき道を誤らせるものとして、警戒や忌避の対象となっている。「主義や理念などという代物は、人間の手にな

る仮そめの物だという自省を保持せねば腐敗する（1993: 185）」と述ている。[3] 自らの行動を律する指針として、講演において、また著書のなかで、自戒の念をこめつつ、あえて偽悪的に繰り返し述べているのは「無思想・無節操・無駄」という「三無主義」である。詳しくは後の節で考察するが、第一の「無思想」について、「特別な立場や、思想信条、理論に囚われないことであり、どだい人間の思想などタカが知れているという我々の現地体験から生まれた諦観に基づいている。ペシャワール会の発足した初めには、「〇〇主義」の論客も居ないではなかったが、そのうち自然に離れていった。…名誉財産はもちろん、いこじな主義主張を人が持ち始めると、それを守るためにどこか不自然な偽りが生まれ、ろくなことはないものである（2003a: 118-119）」と説明している。一貫して標榜し続けている「無思想」の立場と「アジア主義」の思想や立場とが結びつく余地はない。

初瀬のほかに、もう一人、丸山が、中村の心情と心象風景、さらには彼の行動を突き動かしているものを見極めようとして、一年半の歳月をかけ、中村への現地同行取材をはじめ、生い立ちを知る者や、多数の関係者にインタビューをして『ドクター・サーブ―中村哲の一五年』（二〇〇一）を上梓している。[4] その「あとがき」のなかで、丸山は、結局それが成らなかったことを率直に認め、その理由として「中村はそれを語らず、周囲の証言に核心なく、わけても私の眼力が、足らなかった（:288）」と謙遜している。しかし、私自身は、豪腕をふるって、アジア主義でまとめあげる初瀬の論考よりも、「ために本書は、中村の足跡をなぞっただけで終わっている（*ibid.*）」同書に、より多くの刺激と理解と啓発を受けた。

中村を突き動かしている原動力として、丸山は、「あとがき」の最後で、「生きている実感よりはるかに濃密な『ひとがひとであることの確信ではあるまいか』」と、遠慮がちに示唆している。その具体的な内容については、以下のように言う。

> 中村もひとの子である。愚痴も言えば、他人を罵倒することもある。世間にある人並みの苦労も多く抱えている。きわめて見識の高い人間だが、じかにつきあえばごく普通の男である。すぐれて、人間らしい人間である。…

中村の事業を眺めると、苦労や辛酸は絶えないが、そこには人間としての、計り知れない喜びがある、と思えてならない。見捨てられた境遇のひとびとが、ひとりの医師によって助けられ、さらには心をも救われる。すると患者は、日々の生活苦は変わらないにしろ、この悲惨な世に「無垢なる神」がいたことを、実感する。そして崇めるほどに感謝する。

ひとがひとに、心の底から感謝され、それによってお互いが、人間の神聖を共有できることほど、心満たされる喜びはないのではないだろうか（*ibid.*289）。

たぶん、そうなのであろう。ひょっとして、そうではないかもしれないが、それを否定して代わって提示できる理解や洞察を私は持ち合わせていない。しかし同書は、二〇〇〇年一二月に脱稿しており、二〇〇一年の九・一一テロの後にアメリカがアフガニスタンに対して行った報復爆撃の後に起こったことについて、当然のことながら言及していない。私自身は、中村医師とペシャワール会の活動では、それ以後のことが、以前にも増して、よりいっそう重要で意味があると考えており、個人的にもいろいろ教えられ、考えさせられ、人類学者として叱正され続けている気がする。本稿を書きたいと思った主たる理由である。

二　脱帽と賛辞

アメリカは空爆の後に、北部同盟の軍閥を支援して「タリバン征伐」を行い、カルザイ政権の樹立を後押し、その結果として、アフガニスタンを混乱のきわみに陥れ、人々の安全と生命の危機を引き起こし、大量の難民を生み出している。空爆に先立って、すでにアフガニスタンでは、飲料と用水の水源を頼るヒンドゥークシュ山脈の積雪量が地球温暖化の影響によって激減して旱魃が起こり、農村は疲弊し衰滅の危機に瀕していた。そうした事態に直面して、ペシャワール会の活動の柱は、旱魃と戦うための井戸掘りから（『医者井戸を掘る』二〇〇一a）、空爆後の冬を生き延びるための緊急食糧援助へ（『空爆と復興』二〇〇四）、さらには灌漑運河の建設へと変わっていった。活

動の内容も、派遣当初のらい患者の治療から、すぐに裏傷（足底穿孔症）[5]予防のためのサンダル工房の設置と運営（『ペシャワールにて』一九八九）を含むものとなり、さらに最も辺境の地に住む者たちや社会的な弱者貧者の病人のための医療へと拡大し（『ダラエ・ヌールへの道』一九九三）、マラリア大流行の対策に追われ（一九九三）、ＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）基地病院の建設と運営（一九九八）、さらには農民たちが自分の土地で生き延びてゆくための生存支援、すなわち「難民帰農」こそが真の復興である（『空爆と復興』二〇〇四）として井戸掘りや用水路建設への全力投入などへと変わり（『アフガニスタン・命の水を求めて』二〇〇六）、それに伴い、中村の仕事も医師からサンダル工房の親方、病院の院長・経営者、食糧配布の手配師、さらには土木技師、そして土建屋の社長兼現場監督へと、それこそ目まぐるしく変わっていった。

アフガニスタンの現場での緊急性の高いニーズに応えるために中村は、そのときどきで必要とされる知識と技術を自ら習得し、悪戦苦闘しながら、しかし端から見れば軽やかに（医者としての地位や役割に固執しないという意味で）自身の天職を変えてゆく。まさに七変化である。そうしたなかで一貫しているのは、現地の人々を主とし、自らを従として、彼らの真の必要を第一と考えて行動する姿勢である。その原則に愚直なまでに徹しきり、現地の人々と共に生き彼らの視線でアフガニスタン情勢を見つめることによって、混乱と危機をもたらした元凶、すなわちアメリカの軍事攻撃とそれを支援する日本政府の独善と驕慢をはっきりと見据え、不遜と不当を激しく批判するのである。

中村の活動は、ふたつの側面に分けられる。ひとつは、ペシャワールを拠点としてパキスタン北西部とアフガニスタン東北部の病人や、貧者、弱者、農民、難民らのためのさまざまな支援活動であり、もうひとつは日本側で活動を支えるペシャワール会員への説明責任として『会報』に活動報告を載せることや、講演、新聞雑誌の記事、著書などにおいて、アフガニスタンの現状を正しく伝えることである。本稿の題目を「周辺から中心を撃つ礫」としたのは、彼のアフガニスタンでの実践と日本人に向けた発言とが、ともに、アフガニスタンの現場からアメリカを、福岡の事務所から東京を撃つ批判の矢となっていることを意味している。

中村は、最初の著書である『ペシャワールにて』（一九八九）に収録された「『トウキョウ』を撃て」と題する章

のなかで、次のように述べている。

「郷土九州は今やトウキョウの植民地と化し、トウキョウの金で蹂躙されている。関門海峡を封鎖せよ。九州にはまだ自然も人情も食べ物もある。東京と心中することはない。郷土防衛のためアジア諸国と結び、九州解放戦線を結成し、東京とワシントンを撃て！」

皮肉をこめた軽々しい冗談にひんしゅくを買うと思ったら、意外に喝采する者もあった。――「トウキョウ」それは、我々の中にある東京、拝金主義と効率主義で人間を痴呆にした東京、――全てが自分を中心に回らねば収まりのつかぬアジアの田舎大名、東京である（*ibid.*: 212）。

こうした激しい言葉の後に、「こんな冗談が言えるほど、日本は平和である」と肩透かしをかけつつ、しかし、最後には、ふたたび、「我々を砲撃せよ。『トウキョウ』を砲撃せよ。これは虚構の繁栄と余りの貧しさとの間で覚える私の正直な実感でもある（*ibid.*: 213）」と結んでいる。ソ連軍の侵攻に始まる内戦とアメリカの介入によって、二百万人の死者を出し、殺戮と貧困が全土を重苦しく領する現地で活動する中村が、バブル経済に浮かれる日本に帰国して感ずる二つの世界の乖離、そこから生じる眩暈や当惑や怒りが率直に吐露されている。日本とアフガニスタンとの隔絶、別世界の並存と日本側の無関心に激しい苛立ちと怒りを覚えつつ、しかし決して絶望せず、その懸隔を少しでも埋めようと、中村は、アフガニスタンで見たこと、聞いたこと、考えたことを、以後も日本に向けて発信し続ける。そして自らがアフガニスタンと日本を繋ぐ糸となり、両国の人間が、同じ地球で同じ時代を生きる者同士として、それぞれが今より少しでもまっとうな暮らしができるような介入を粘り強く続ける。アフガニスタンでは、病人や貧者、難民のための医療と人道支援活動であり、日本では、バブルに浮かれて正気と謙虚を忘れたかに見える社会の叱正である。

さらに、二〇〇一年の九・一一同時テロの後には、自由と民主主義の理想を実現し、安全な世界を取り戻すためとして称して報復の空爆を行い、無辜の民を多数殺戮するブッシュ政権の傲慢さと、それを支えるアメリカの独善

と自己中心主義に対する激しい批判と糾弾である。そうした中村の発言は、旧約聖書のなかでダビデの放った礫が巨人ゴリアテの額に命中して倒したように、ブッシュ政権の軍事行動の不当さを、倫理的、理念的に的確に射抜いて破砕する。ここでダビデの礫の比喩を出したのは、中村が高校時代に洗礼を受けたクリスチャンであり、彼の言動のなかに論語の素養や儒教的道徳とともに、[7]キリスト教の教えの影響を見出すからであり、また彼の小柄な体つきと豪胆な行動とが、聖書の描くダビデのイメージを髣髴させるからである。[8]

中村自身は、三無思想のほかには、自らの思想について言挙げすることがほとんどない。偉そうに理念を語り、御託を並べるよりも、まず仕事をせよ、現地の人々のために働け、というのが彼の行動を律する指針である。しかし、その働く現場で見たこと、聞いたこと、現場の向こうに見えてくるアメリカや日本の姿、それら諸々について考えたこと、怒ったこと等々を、可能な限り幅広い媒体（たとえば新聞では朝毎読の三大紙、総合雑誌では『世界』から『潮』まで）を通して日本に伝えている。中村は、ペシャワール会から給料を一切もらわず、四人の子供のいる家族の生活の糧を、現在では、会の広報と実質的なマネージメントを担当している石風社の福元代表がアレンジする講演会の謝礼や新聞・雑誌等の原稿料等で得ている。[9]そのため、結果として、彼の現地活動の報告と、日常の出来事から政治的軍事的な大事件に至るまでの身の回りの世界に対する率直な感想、悲憤慷慨や希望、アメリカの政策や日本社会の現状に対する痛烈な批判、さらには現代文明への疑問や疑念が、少しばかり表現を変えただけで、何度も繰り返しながら、異なった読者や聴衆に向けて発せられている。単著だけでも一〇冊を超えている。

そうした中村の活動のエッセンスと、それを支え導く考え方、そしてペシャワール会の活動が続いてこられた理由について、井上ひさしの質問に、中村とともに答えながら福元が、次のように簡潔に説明している。活動の基本は、「現地の人たちが生きていくために、今何を一番必要としているか（2004: 22）」を常に考え、最優先してゆくことにある。援助する側の国際組織やNGOの母国は先進国なので、人々の関心は識字教育や女性解放や人権問題などに集中しがちである。そのような目的を掲げると、実際には現地での緊急度や優先順位が低くても、あるいはまったく必要とされていないプロジェクトでも、支援者の側が喜ぶので資金も集めやすく、そのまま実施されてしまう。そのような援助は、善意のつもりが独善となり、支援という介入が当該社会の価値や道徳の否定や当人たち

の望まない変化の強要になりかねない。[10]

しかし、ペシャワール会では、中村医師が現地にいるので、現地の必要に応じて活動方針が具体的であり、現地側から提案された事業については、実施のための方法は議論するが、その事業をやるかどうかについては議論しないという。現地の実情に目を凝らし、人々の声に耳を傾け、そこで真に必要とされている事業を中村が提案したら、福岡の事務局は、それを信じて実行に移すために最善を尽くすだけである。本部事務局―現場スタッフ―現地の人々の関係が、上意下達の主従関係とは完全に逆転し、真のボトム・アップとなっている。[11] それゆえに、必要があれば(あるかぎり)、たとえば山岳地帯の診療所を一〇年以上にわたって維持し、戦場となっても撤退せずに活動を続けたのである。あるいは、旱魃になれば井戸を掘り、国連の制裁でNGOが撤退してゆくときには、国際世論の潮流に逆行して、逆にカーブルに臨時の診療所を五ヶ所に設け、空爆下で食糧の配布を敢行したのである(*ibid*:26-29)。現地の人々を主とし、中村が従となり、福岡の事務所がさらにその下で僕となって支える構図は、近年かまびすしく唱えられている住民参加や、住民主導という開発理念を、[12] すでに二〇年も前から先取りして実践してきたことを示している。

さらに付け加えれば、国際協力や社会開発の理念として現在盛んに唱えられている「人間の安全保障」は、そうした難しい言葉こそ振り回さないものの、まさに中村が二〇年にわたって実践してきたことにほかならない。人間の安全保障とは、外務省によれば、「貧困・紛争・地雷・難民問題・感染症・環境破壊・自然災害など人間に対する様々な脅威」のなかに置かれてしまっている人々に対して、「人間の生存、生活、尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、人々の豊かな可能性を実現するために、人間中心の視点を重視する取り組みを統合し強化しようという考え方」であり、二一世紀の日本外交の政策理念のひとつとなっている(外務省ホームページ http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/hs/index.html およびパンフレット『人間の安全保障基金』二〇〇六)。[13]

中村が「人間の安全保障」という国際協力の大前提あるいは大原則を先取りして、二〇年あまりにわたり、その実現のために一貫して活動をしてこれたのは、現地の病人や貧者、弱者を主として、自ら従となって、真に必要なものを提供するという姿勢をしてきたからである。中村は言う。ペシャワールで見て、感じて、考えて そして

「ペシャワールについて語ることは、人間と世界について全てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、難民、近代化による伝統社会の破壊、およそ全ゆる発展途上国の抱える悩みが集中しているからである（1992: 250）」。確かに、イギリスとソ連とアメリカという、文明と近代化を自尊する世界列強の侵略がもたらす災厄と悲惨を、一身に集めた特異点のような体験を強いられてきたアフガニスタンの現実を直視し、その苦痛を癒すために一番必要な援助を行ってきた中村医師の実践の核は、「人間の安全保障」という言葉で示される内容と自ずと合致している。

しかしそれは、「人間の安全保障」の実現という高邁な理想の実現のために援助することや、ましてや、その理想を吹聴して説いて回ること、さらには、それを用いて活動の自己正当化を図ろうとすることとは正反対である。どこに身を置き、誰のために、どのように役立つかが常に問われなければならない。中村の場合、周辺または底辺の近くに身を置き、最も貧しく虐げられた人々がまっとうな暮らしを取り戻せるための支援を、実際に続けてきたことが特筆に値するのである。本節を賛辞と題した所以である。

三　人類学者として

私は、中村医師の講演を聴いたり、テレビ番組で見たりして、一方的な親近感と敬意を抱いているものの、直接にお目にかかったことはなく、お話したこともない。ペシャワール会で活動する友人は何人もいるが、私自身が直接にコミットしているわけではない。部外者である私が、中村医師とペシャワール会の活動について自信をもって言えることは限られている。中村医師の主要な著作のほとんどを出版し、ペシャワール会の広報担当理事であるとともに、近年ではそのスケジュール管理を含めたマネージメントをして中村医師を支えている福元は、そこまで深くコミットするきっかけについて、「中村医師に嫉妬した」からだと語っている。「何に嫉妬したのか今ではよくわかるが、中村医師のアフガニスタンとの関係のあり方、その深さに嫉妬したのである。ひとは、他者とこれほど深く関わりあうことができるのか（2004: 40-41）。」福元にならって言えば、私は中村医師の活動と、著作と、折々の

発言に接して、中村医師に嫉妬するとともに敬服脱帽し、しかしそれ以上に畏怖してきた。

なぜならば、彼が放つ礫が、人類学者としての私自身に対しても向けられていることを自覚せざるをえないからである。本節で試みようとするのは、その礫から逃げず、せめて眉間を直撃されて倒れないように、少しばかり半身によじって避けながら、礫にこめられたメッセージに応答しようとするものである。

彼の礫が私にも向かっても飛んできていると感じるのは、彼自身が続けてきた活動が、人類学者の活動とも重なりあっているからである。すなわち、彼が次のような言葉で語ろうとしているのは、アフガニスタンの人々と文化に対する謙虚と畏敬の念であるが、それはまさに文化人類学が掲げてきた文化相対主義の立場にもとづく異文化理解の志の表明であり、その難しさに対する自戒である。「問題は、自分のものさしで他人の幸・不幸を裁断し、文化や生活意識の差異を優劣で論じることにある。あげくは超えがたい溝を作って相互不信をエスカレートさせる。…現地で見る限り、異文化に対する我々の理解の浅薄さを身に染みて感じた（2002: 26）」。

しかもアフガニスタンの現場から日本について語る中村の発言と批評や批判は、マーカス&フィッシャーが『文化批判としての人類学』（一九八九）で提唱する人類学のあるべき姿と完全に通底している。その意味では、中村は、医師であり、土木技師であり、現場監督であることに加えて、人類学者であると言えるかもしれない。また個人的には、一九九一年のフィリピン・ルソン島・ピナトゥボ山の大噴火以来、現地での災害救援や復興支援、さらには生活向上のための支援をするNGOの活動に、私自身が思いがけずに巻き込まれていったために、中村医師の活動と発言を他人事として聞き流し、見過ごすことができなかった（清水　一九九七、二〇〇三）。

人類学者は、故郷を遠く離れた異郷の地で長期間のフィールドワークを行い、それにもとづいて民族誌を作成することを仕事としてきた。クリフォード・ギアツによれば、そうした仕事を通じて人類学者は、人間社会の多様な文化的可能性を確かな現実として具体的に示すことによって、逆に自文化を対象化し、相対化し、自文化の認識を深める契機を提供してきたというのである。それは、西欧の普遍主義が安易で単純な反相対主義へと陥ることに対する警鐘であり、ギアツ自身の言葉を借りれば、「反相対主義に反対する（anti anti-relativism）」立場を堅持することの必要性の主張であった（ギアツ二〇〇二［Geertz 1984］）[13]。

ギアツと同様の立場にたって具体的な方法を論ずるのが、マーカス & フィッシャーの『文化批判としての人類学』（一九八九）である。彼らは、二〇世紀の人類学が、ほとんどが西洋人である読者たちをふたつの面で啓蒙しようと公約してきたという。ひとつは、世界規模で明らかに拡大しつつある西洋化の過程から、各文化固有の生活様式を救出することであり、もうひとつは、西洋自身のための自文化批判の一形式として人類学を役立たせることである。この両者が合わさって、われわれ（西欧）のやり方は多数の可能性のなかのひとつに過ぎないという自覚を深め、他者の人間的可能性についてわれわれ自身の目を開き、日常的にはなんら異議がとなえられることのない暗黙の前提に少しでも意識して取り組むことが導かれるという（*ibid.* 250-51）。

すなわち、ギアツと同様、彼らにとって人類学とは、自己反省と自己成長のために文化的多様性の豊かさに価値を認め、それを学び理解し援用することによって、エスノ・セントリズム（自文化・自民族中心主義）の見えざる檻から、自らを解放しようとする企てなのである。異文化を内側から深く理解するためには、自文化の前提をいったん留保して、異文化の読解コード（今風の言葉を使えばOS）を習得して用いる必要がある。すなわち「現地の人々の肩越しに」、彼らの眼差しと同じように世界の成り立ちを見よう、解釈し理解しようとするのである（ギアツ一九八七）。そして、いったん彼らの読解コードを習得してそれで異文化を理解できれば、今度は逆に彼らの視点、彼らの読解コードに依って自身の文化を見なおすとき、以前には当然と思っていたさまざまな常識が、ある特殊な前提や約束事にもとづいていることが実感され、自文化の相対化と批判や内省とが自ずと導かれる。文化人類学の営為とは、異文化理解であるとともに、その迂回路を経由した自文化理解と自文化（西欧）批判という企てでもある。

中村をはじめ、ペシャワール会のワーカーとして現地で活動している人たちは、多かれ少なかれ、皆、この異文化を迂回した自文化の相対化という視点を自然に体得し、日本社会に対する違和感を持つに至っている。たとえば中村は、初期の頃から異文化に対する驚きの連続であったことを認めたうえで、次のように説明する。「日本人は、受験競争だとか、〝競争〟という言葉を使いながらも、これは全体としてはやはり調和ということを重んじている社会ですね。ところがむこうは逆でして、足の引っ張り合いが非常に多い。それもときには飛び道具が出てくる。…

自分としては馴染みにくい感じがしましたね。しかし馴染んでしまうと、逆に日本の方が、日本もこれはまた異常な社会でして、なんのかんの言いながらも、一億二千万がひとつの家族のように、自分たちの中でチンマリと一つの世界を作って暮らしているというのが現実です。それは、よその文化を背負って日本に戻ってくる人、あるいはよその国で生まれ育った人にとっては、非常に住みづらい社会であるという感じがいたします(1990:57)。

また年に四回発行される会報は、ほとんどが日本に暮らすペシャワール会の会員と、現地とをつなぐ重要な媒体であるが、それを通して、読者＝会員は、居ながらにして中村医師の同伴者として、パキスタンやアフガニスタンの状況に思いをはせ、振り返って日本に対する別な見方を示唆されることになる。[15] 内容の濃い十数頁には、中村による事業や活動の説明、現地の政治社会状況の報告、彼の真摯な思い、激しい義憤、文明批評のほか、スタッフやワーカーの人となりの紹介、彼ら彼女らの身辺雑記や異文化体験・見聞録、随想などが載せられている。

たとえば中村は、バブル時代の日本に戻ってきて、第六回総会で「難民問題とさまよえる豪華客船日本丸」と題する帰国報告したとき、バブル経済に浮かれる日本を痛烈に批判してつぎのように述べている。

> これは、ペシャワールのような片田舎から時々帰ってきて驚く浦島太郎の感想ですが、アフガニスタン難民の状況を通してみる限り、豪華客船の日本丸は、内部が華美になるばかりで、行き着く先もなく、さまよっているように見えます。…批判を覚悟で言えば、日本は金をもてあまして、ふらふらしているのに、日本列島の住民は、相変わらずゆとりなく、密室の客船のなかでガサガサしたり、逆に虚無的になったりしています。…今の日本は、宝を積みすぎてその重みで今にも沈没しそうな船のようだ(『会報』No.17, 1988)。

中村以外にも、たとえば事務局長をしていた佐藤は、「中村医師と共にペシャワールと関わってくることで、拝金主義が横行し、人と人との間の共通の規範が薄れ、弱者が疎んじられる日本の現状にも目を開かされることになりました。むしろペシャワールの人々の方が、戦争、流浪、飢餓、病気、裏切りという困難の中にありながら、深い苦しみや悲しみ、そして喜びを生き生きと体験し、それゆえに信義を重んじ、また弱者を大切にしていました。

その姿が、私たちがまだ貧しかった頃に大切にしていた生き方を思いおこさせ、さらに、今私たちを取り巻く現実の姿を浮かび上がらせてくれたように思います」と述べ、「素人の集まり」であることを守ってきた会であるが、自分たちもまた活動をとおして、成長したことを確認している（『会報』No.24, 1990）[18]。

あるいは、理学療法士の倉松は、夏休みを取って日本に戻り、正確で迅速な交通機関、多種類が取り揃えられた店、遠く離れた友ともいつでもすぐに取れる連絡など、「日本ならではの快適で便利な生活を享受」したが、寒いほどに冷房の効きすぎた電車や部屋、買ったものについてくる不要な装飾、ほとんどが本来の価値を生かされずに使い捨てにされる品などの中で暮らすうちに、「居心地が悪くなってきました。ペシャワールの宿舎にも、冷蔵庫、全自動洗濯機、電気掃除機、電子レンジ、エアコン、ビデオなどがありますが、停電や断水がある分日本よりまともな気がします（『会報』No.38, 1993）」と述べている。

同じく医師の小林も、夏に一時帰国をした際、バブル経済が崩壊して不況のどん底にあると言われる日本が大変豊かな国であり、町にはものが溢れ、ひとつひとつ種類が多く、しかも品質が最高のものであることに改めて驚かされたが、しかし、不況にもかかわらず、いかに無駄が多いかを考えさせられたという。そして「大量に消費を続けなければ、経済が好転せず会社が倒産し、失業者が増える。言い換えれば、もっと無駄をしなければ経済がよくならないのでしょうか。もっと無駄をすれば資源や環境はどうなっていくのでしょうか。このような資本主義経済はどこか矛盾しており、やがて破綻がくるのではないかと思います」と、日本の繁栄を相対化する醒めた見方をしている（『会報』No.57, 1998）。

中村の自文化＝社会批判は、もちろん、『会報』以外の媒体を通しても、積極的に発せられている。

たとえば、「文明の倨傲」と題したエッセーでは、山奥で伝統的な暮らしを営む村の子供たちが農業や牧畜の手伝いで学校に行かないことについて、「子供の権利」が侵害され、教育を受けられずに文盲のままに留め置かれている、と嘆く善意のNGOや国連職員に対して、次のような反論を述べている。「識字率や工業化は社会・文化の優劣を測るものさしになり得ない。カネと暴力が支配する米国社会が優れているのか。武器を生産して無節操に儲けるフランスやロシアが進んだ国であるのか。欧米の技術文明を盲目的に信ずる日本の教育システムが、戦後何を

もたらしたのか。諸君はまず、ホワイトハウスに行き、大統領を教育して武器輸出と対外干渉を絶ち、アフガニスタン戦争の死者二〇〇万人に対してロシアと共に謝罪することから始めなければならない。道義的に腐敗した国がこの平和な山村で教育を論ずるのは笑止の沙汰である。…『栄華を極めたソロモンも、一輪の野の花に如かざりき』とは、外ならぬ西欧精神文明のふるさと、新約聖書の美しい一節である（1999: 186-87）[17]。」

このような憤激の背景には、総人口約一、五〇〇万人のうちで死者二〇〇万人、難民六〇〇万人の犠牲者を生み出し、徹底的に国土を荒廃させるに至ったアフガニスタンの内戦が、米ソの代理戦争にほかならず、両国が、自国の利害に基づいて、アフガニスタン「問題」に対処したからである、との認識がある。一九七八年の四月革命によって近代化を進めるダウード政権に代わり社会主義政権が樹立され、その親ソ政権がイスラーム教徒のゲリラ戦＝ジハード（聖戦）によって崩壊の恐れが生じたとき、ソ連は、政権を支えるために一九七九年一二月に八万の軍隊を送り込んで直接に介入した。アフガニスタンの惨状に関して、ロシアが責任を有することは当然である。ソ連はベトナム戦争のジェノサイド（皆殺し）以上の野蛮で粗雑な方法で、農村社会という「封建制の温床」そのものを破壊して近代化するという、農民にとっては迷惑千万な戦略を実行したからである。しかし中村は、加えてアメリカもまた同罪であると厳しく断罪する。アメリカは、ソ連を泥沼の内戦に引きづりこみ、「生かさず殺さず」戦争を継続させて、国力を長期にわたって消耗させる戦略のもと、ゲリラ勢力に対して、地対空スティンガー・ミサイルをはじめとする近代的な武器供与や資金提供を積極的に行ったのである。ただし、中村の怜悧な眼差しは、ソ連邦の解体という結果、短期的には成功したかに見えたアメリカの間接的な介入が、やがては九・一一同時テロをはじめ、現在カルザイ政権の安定を根本から脅かせている「イスラーム原理主義」諸勢力の軍事的肥大化を導き、天に唾する結果としてわが身に降りかかってくるだろうことを正確に見抜いている（1993: 13-20）。

アメリカをはじめとして、自国の利益のためにアフガニスタンに介入する勢力に対する中村の批判の礫は、二〇〇一年の九・一一同時テロへのアメリカの報復攻撃を契機に、いっそう激しくなる。アメリカの空爆とタリバン政権打倒のための派兵、それに続く復興支援、それら一連の過程を支持する日本に対して、中村の義憤は鎮まることがなく、さまざまな機会と媒体をとおして、痛烈な批判を繰り返している。一例として「復興援助の傲慢を思う」

と題された二〇〇一年度の活動報告を紹介することができる。その冒頭で中村は、現在のアフガニスタン援助の構図そのものが、「先進国社会」の病理と行き詰まりを如実に映し出しているが、しかし私たちが事実を率直に見る眼を失って独善的な世界に安住しているため、結果としてアフガニスタンの人々にひどい仕打ちをしているアメリカに加担してしまっているのだと、その義憤の理由を率直明快に説明している。関連する部分を引用すると、

> 現在のアフガニスタンの状況は、大の大人が寄ってたかって、瀕死の幼な子を殴ったり撫でたりしているのに似ている。…密閉した情報空間で、話題性のみに振り回され、虚像が実像と混同されるのは恐ろしい。空爆や対テロ戦争と同じ論理で、復興支援のシナリオがまかりとおる。「遅れて貧しい人々を助けたい。その進歩発達を阻んでいた『圧制』から解放され、自由と民主主義がもたらせようとしている。この復興に力を貸すのだ」というのが大方の考えだろう。しかし、これは完全に錯覚である。文明の名において、ひとつの国を外国人が破壊し、外国人が建設する。そこに一つの傲慢が潜んでいないだろうか。
>
> 昨年九月、米軍の空爆を「やむを得ない」と支持したのは、他ならぬ大多数の日本国民であった。戦争行為に反対することさえ、「政治的に偏っている」と取られ、脅迫まがいの「忠告」があったのは忘れがたい。以後私は、日本人であることの誇りを失ってしまった(『会報』No.72, 2002)。

再び人類学の問題に戻れば、サイード(一九七八)のオリエンタリズム批判を受け、とりわけ一九八〇年代の半ばごろからは、たとえ自文化批判とはいえ、民族誌を書き他者を表象するという人類学の根本的な営為そのものに対する再検討が活発に進められてきた(Clifford 1986, Geertz 1988, etc.)。そもそも他者を表象することは人類学のみが独占して行う行為ではない。「日頃忘れ去られていたり厄介払いされている人々や問題を表象(レプリゼント)=代弁すること(1995:33)」は、広く知識人の存在意義であり責務であるとサイードは主張する。サイードはサルトルを引用しながら、知識人は隠遁した哲人王のごとき者ではなく、「社会によって囲いこまれたり、丸め込まれたり、とりこまれたり、こずきまわされたりしたときにはじめて、またそのような基盤の上にたってはじめて、知識人の仕事は成立

する（*ibid.*:119-120）」と述べ、今ある世界のなかで生きていることの拘束や制約すなわち世俗性への鋭敏な自覚の重要さを説いている。

そして知識人とは、周辺的存在あるいはアウトサイダーであり、専門分化（スペシアライゼーション）に抗するアマチュア（すなわち狭量な専門的観点や形式的な技法にしばられることなく憂慮と愛着によって動機づけられる活動をする者）であり、国家と伝統から離れ権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である、と定義する。先に中村は、人類学者でもあると述べたが、医師という専門分野に安住することなく、現実の具体的な問題へのコミットメントを積極的に行い、そこからアメリカの介入がもたらしたアフガニスタンの現状と真実を語り続けるということから、サイードが述べる意味での、まさしく知識人の模範や範例そのものということができる。

また本稿のタイトルを「辺境から中心を撃つ」としたのは、第一に中村医師の著書『辺境で診る辺境から見る』に触発されたからである。と同時に、テッサ・モーリス＝鈴木の著書『辺境から眺める――アイヌが経験する近代』も意識している。モーリス＝鈴木は、辺境の重要性について次のように述べている。「なぜなら、辺境という存在が、国史を、地域史を、ひいては世界史を違った視座から再訪する旅の出発点となり、国家／国民という中心からは不可視化されかねない問題を提起しうるからである（2000: 4）。」そして、同書の目的は、「たとえば『進歩』といった潜在的想定そのものに異議を申し立て（*ibid.*18）」ることであるという。実際、確かに、その企てに成功している。

しかし、モーリス＝鈴木は、日本とロシアの辺境に住まうアイヌの人々の経験を追い、その地から歴史を、世界を眺めかえし、近代を再考することに徹してはいるが、眺め批判するだけにとどまっている。眺め言葉を尽くして語るが、辺境に住まい、私たちと同時代の今を生きている彼ら彼女らのより良い未来を開くために、具体的な何かをするわけでもない。[18] しかし、中村医師は、まず、辺境の地にあって病人を診療し、貧者弱者の生存のために尽力し、彼らが質素ではあるが充足したまっとうな暮らしを取り戻すために必要なもの（品物よりも、医療をはじめ灌漑や農業の、知識や技術や道具）を届け、そうした活動の後に、そこで見たこと、そこから見えることを報告しているのである。世界を違った風に眺め、国家や国民を批判するために貧者や弱者たちの近くに身を置いているわけ

ではない。だからこそ、現場から発する彼の言葉のひとつひとつが寸鉄となって、強者の驕慢を刺し、市井の人の心を打つのである。

四　現場主義、あるいは現地の困窮者を最優先にする実践

縁あってペシャワールに赴任していった中村の報告で、私がもっとも強い衝撃と感銘を受けたのは、赴任して早々一九八五年のクリスマスのエピソードである。おそらく、それが中村の原点であり、それ以後の著作でも繰り返し触れられ、二〇〇六年のＮＨＫ番組でも語っている（2006: 38-39）。らいで全身に潰瘍化した膿疱ができ、喉頭浮腫のためにしばしば呼吸困難と肺炎に陥ったハリマという若い女性患者に対して、中村は最終的に気管支切開を行ったが、それで呼吸は楽になったものの、同時にそれはまともな社会復帰が困難になったことを意味していた。そうして生きながらえさせるのが、果たしてハリマにとって幸せだったかどうかを確信できず、中村は思い悩んでいた。その当時のアフガニスタンとペシャワールの状況は、あまりに絶望的であり、「人間」に関する一切の楽天的な確信と断定とを、ほとんど信じられないものにしていたという。そして「自分もまた、患者たちと共にうろたえ、汚泥にまみれて生きてゆく、ただの卑しい人間の一人にすぎなかった。ただひとつ確信できたのは、…ドクター・サーブと尊敬されていても、泣き叫ぶハリマとまったく同じ平面にあるという事実だけであった」ことを痛感する。

> この一九八五年の暗いクリスマスを私は一生涯忘れることができない。ソ連軍はペシャワール近郊のカイバル峠にせまっていた。峠のてっぺんでは激戦が展開され、負傷者を乗せた車が連日連夜、市内の各病院と峠を往復していた。…
>
> 当時所属していた或る海外医療協力団体からは、はるか離れた国外で行われる「重要会議」に出席するよう矢の催促が来ていた。「発展途上国の現実に立脚して海外ワーカーとしての体験を分かち合い、アジアの草の根の人々とともに生きる者として…。美しい自然と人々に囲まれたアジアの山村で語らいの時を…」

白々しい文句だと思った。美しく飾られた言葉より、天を仰いで叫ぶハリマの自暴自棄の方が真実だった。この非常時に二週間以上も置き去りにする訳にはいかなかった。…無駄口と議論はもうたくさんだ。最後通牒のような「出席要請」を力を込めて引き裂いた。私は、催しものと議論ずくめの割に中身のない「海外医療協力」と、この時決別したのである。

クリスマスの日、ペシャワールでいちばん上等のケーキをヤケになって大量に買い込み、入院患者全員に配った。(1993a: 95-96, 1993b: 162-163)

先にも見たように、中村自身は、主義や理念を掲げそれに固執することに厳しい批判を投げかけている。同様に思想についても懐疑的であり、次のように述べている。「ただ、良心的事業をもって語らせよ。人の思想の限界とそれに執着する事の空しさは、まさに『アフガニスタンの悲劇』を目の当たりにして得た実感である(1993: 173)。」理念よりも行動、口先ではなく実践こそが重要であり、結果がすべてということは、実際に中村が、ペシャワール会から派遣されてきたワーカーに対して、口を酸っぱくして繰り返し言い続けていることである。派遣されてすでに一五年におよび、中村が不在のあいだは、病院の院長代理として運営の責を負うまでになった藤田千代子看護婦は、次のように証言している。「中村先生がよく朝の訓示で、『議論はいいから、やれ。お喋り・言い訳は信じない。誠実な努力と結果だけを見る』とおっしゃることが、身に染みて同感です。(『会報』No.58, 1998)。」

あるいは、同じくワーカーとして、井戸掘りや灌漑水路の掘削で活躍している蓮岡が、中村の口癖である九州弁の「せからしい」を解説して、次のように説明している。その言葉は、突然に舞い込んだわずらわしい揉め事(こちらでは茶飯事)や、信頼していた人からの予想だにしなかった突然の裏切り(これも茶飯事)に直面したときに、中村が頻繁に使う言葉である。分院の離脱騒動が起こったときには、一日に二〇回ほども中村の口をついて出たために、蓮岡も使い方を覚えて自らも便利に使うようになったという。

「せからしい。」先生は揉め事が押し寄せて来たとき、しばらくの沈黙の後でこの言葉を使う。だがその後は

必ず、思い切った、また、的確な答えを用意しておられる。嘆くと同時に腹を決め、次の行動に備える。…「せからしい(は)」、決して面倒くさいという投げやりな言葉ではない。「ごちゃごちゃあれこれ考えず、これでやる」と言う、意思表明であり、論議よりはまず行動を求められるこの場所では、もっとも実践的な感情である(『会報』No.64, 2000)。

すなわち、「せからしい」に示されているのは、議論よりもまず実行、不言あるいは有言のいずれでもかまわないが、まず行動せよ、実践あるのみ。その行動の是非や功罪の判断は、事前の議論では明らかにできず、事後の結果、成果がすべてであるという考え方である。もちろん、何も考えずに猪突猛進することを良しとするわけではない。行動には明確な原則がある。それは、現地の人々、とりわけ貧者、弱者、虐げられている人々の長期的な福利厚生幸福のために役立つこと、彼ら彼女らが望み、なおかつ中村が納得し同意した援助を行うという簡単なことである。もちろん中村が納得し同意する際の判断基準は、現地の文化、とりわけその価値観や人間観、世界観であり、それとともにペシャワール会の台所事情すなわち資金力を中心とするロジスティクス(補給・支援の態勢)である。が、日本側の価値観を押しつけることは決してない。そうした姿勢を中村の「思想」と呼ぶことができるかもしれないし、少なくとも、その手がかりになるであろう。[19]

現地の人々を主とし、自身を従とする基本姿勢は、しかし、何から何まで現地の言い分を飲んで従うことではない。たとえば、井戸掘りや用水路の掘削の現場で奮闘した蓮岡は、現地での活動は、「日本人が主体になってやらなければならない」という指示、すなわち自ら現場に身を置いて現地の人々と共に汗を流し、率先垂範することの重要性を自らの体験から痛感したという。彼によれば、現地で活動する国連を含めた他のNGOでは、プロジェクトの実施は必ずアフガニスタン人の代表者が取り仕切っており、外国人の仕事はその報告を処理しているだけであった。そのようなプロジェクトでは、オフィスや車等の設備は立派だが、権力をもった現地責任者が、自分の都合で仕事を優先するために、賄賂まがいの八百長が茶飯事となり、意欲が低いせいで作業は遅々として進まず、その結果、現地住民に還元される援助というのはごく僅かになってしまう。大半の事業資金が、事務所経費や外国人スタッ

フの高給、あるいは賄賂やピンはねで消えてゆくのである。[20]

そのため、井戸掘りプロジェクトでは、最初の一人から蓮岡が中村医師の立会いのもとで、直接に面接して採用し、自ら労務から会計までの仕事を担当しながら組織を作っていった（蓮岡「現地活動報告」中村　2001: 276-77）。あるいは、中村自身が現地を主とすると繰り返し明言しながら、しかし「不正が必ず起こるから」お金を現地の人には触らせず、会計には日本人を置くようにしている、という（2003b: 66）。肝心要のポイントはしっかりと押さえているのである。しかし逆に、現地のスタッフの育成の観点から、大事なことを何でも日本人がやってしまうということに対しても自戒と注意を怠らない。

さらにまた、現地の人々を主とするといっても、実際の現場で働くスタッフや患者、住民たちは、文化的、宗教的、民族的、また地域・親族集団ごとに分かれて必ずしも同質の一枚岩ではない。病院のスタッフや関係者のあいだでさえも、アフガニスタン人とパキスタン人、イスラム教徒とキリスト教徒、民族・親族集団ごとの派閥などが複雑に重なりあって割拠対立しており、主とすべき現地の人々とは誰か、誰の声に耳を傾けるべきかという問題の解答は容易ではない。たとえば、PMS（ペシャワール会医療サービス）病院の建設にあたっては、建設業者の手抜きやふっかけのトラブルから始まり、スタッフ間の無用な対立と内部抗争に悩まされ続けた。最終的には、対立するスタッフの全員を解雇してでも「ゼロから再び出発する」との強い決意で非常事態宣言を出し、綱紀粛正を掲げて公私混同や怠業を厳しく取り締まり、逆恨みを買って襲われることを危惧して、「夜には拳銃を枕に眠った」という（中村　1999: 278-297, 2003: 49-52）。

最も緊張が高まったときには、場合によっては「生きては帰れまい」との覚悟さえ決めた。すると、死を目前にした病人が見慣れた景色を眺めるように、目に触れる全てのものが鮮やかに映ったという。まさに、末期の目である。多くの関係者が、自己保身や組織の延命、自身の利益を第一にして行動したのに対して、中村が体を張り、時に命を懸けて活動する際に行動の指針とし続けたは、「将来患者たちにとって何が最善かという問題」であった。最も弱く貧しく支援を必要としている人々を第一と考えるのである。[21]

まさに身命を擲って活動に専心する中村ではあるが、先述したように、大上段に振りかぶって思想を語ることは

ない。それでも自身を律する考え方、行動の指針については、さまざまな機会に率直に開陳している。ひとつが先にふれた「三無主義」であり、三つの「無」すなわち無思想・無節操・無駄を総合した謂いである。それは、初めは半ば自虐的に、冗談半分で述べたものが、日本での議論よりも現地での活動を主とする会の方針に合致し、案外と核心に触れていることに気づいたために、繰り返し唱えるようになったという（『会報』No.33, 1992, 1993: 208-212, 2003a: 118-121）。もっとも簡明な説明を紹介すれば、

「思想信条にとらわれず、浄財だと思えば誰からでも寄付を仰ぎ、時には試行錯誤の無駄がいる。ペシャワールの事業にかかわる者などはバカである。利に聡い小利口者ばかりでは、世の中、面白くない。バカも世の中の味付けだ」ということである。これを美辞麗句で飾れぬことはないが、「立派なことを言うやつに限ってロクな者は居らん」というのも真実で、私たちの暗黙の合意は、「歯の浮くような立派なことは言わん。口先でなく、やることで勝負する」ことであった。これをいい加減と見るか、日本人らしい実直な誠意と見るかは自由である（1999: 137）。

そもそも三無主義とは、「無気力・無関心・無責任」を指し、六〇年代から七〇年代にかけて学生運動が高揚したあと、祭りの後の虚脱感と白けた気分を生きる若者の生の形を、嘆息したり揶揄したりして指す言葉であった。[22] おそらく中村は、この言葉の本来の用法をふまえた上で、それを換骨奪胎して、半ば照れ隠し半ば真面目に、会の方針を示す言葉として唱えていると考えることができる。自己の活動方針を「無思想・無節操・無駄」と卑下して語る向こう側に、本来の三無主義を転倒し、それに代わって、気迫と責任をもって現地に介入関与する中村と、それを支えるペシャワール会の熱い思いがはっきりと透けて見える。

ペシャワール会の創立二〇周年を記念して発刊された、『ペシャワール会報――一九八三～二〇〇四合本』（二〇〇四）には、会長である高松勇雄の短い巻頭言が載せられている。そこで高松が強調しているのは、ペシャワール会が中村哲医師の活動を支援する団体として一九八三年九月に発足して以来、[23] 二〇〇一年の九・一一のテロ事件を

切っかけとして会が「全国区」に拡大した後も、『『中村哲ファンクラブ』という性格は今日に至るまで変わっていない」点である。そして現地のことは中村医師が一番詳しく、彼の活動理念に賛同した者の集まりがペシャワール会なので、中村医師の活動方針をそのまま会の方針としてきた。すなわちそれは「三無主義」であり、加えて「誰も行かない所へ行く」「現地と同じ目の高さで支援する」といった、「徹底した現地主義を貫いて参りました」という(:33-34、棒線筆者)。

高松に続いて中村も越しかたを振り返り、自らの活動を総括している。その内容は、「現地とともに—『国際協力』から遠く離れて」という題目が的確に示しており、キーワードは「現地」である。中村の知る現地とは、九州とパキスタン北部そしてアフガニスタン東部だけであり、その活動の特色は優れて地域的である。だから、「国際協力」ではなく「地域協力」と呼ぶのがふさわしく、世にいう「国際NGO活動」とは対極にあって、それゆえ巷の流行から自由な場に居られた、という。そして会の方針が三無主義であることの補足として、「カネは天下の回りもの。徹底した現地中心主義で、…現地での実事業を優先、異なる文化を許容し、相手が個人であろうと国家であろうと、生命を軽んずる暴力を排除する(*ibid.*: 37-38)」という変わらぬ姿勢を維持してきたと説明している。

また中村は、二〇〇六年六月と七月の二ヶ月のあいだ毎週月曜日にNHKで放映された「知るを楽しむ、この人この世界」の番組のなかで、またそのテキスト[24]のなかで、ペシャワールへと導かれてゆく自身の生い立ちについて、率直に語っている。縁もゆかりもなかった中村が、アフガニスタンやパキスタンの現地に吸い寄せられるように近づいていったのは、決して単なる偶然ではなかったが、しかし「よく誤解されるように、強固な信念や高邁な思想があった訳ではない」という。直接のきっかけは、関門海峡を生まれて初めて渡るよりも一年前の一九七八年六月に、福岡登高会のヒンズークッシュ遠征隊に参加して現地への愛着を抱いたことである(が、医師としての赴任は考えなかった)。その四年後にペシャワール・ミッション病院の院長が来日してJOCS(日本キリスト教海外医療協力協会)に医師の派遣を要請した際、「あそこなら一度働いてみたかった」ので名乗りでたところ、とんとん拍子で派遣が決まったという。別の箇所では、多少は現地の事情を知っていたこともあり、「ある種の義侠心に駆られ、『まんざら知らぬ土地ではありませんから』と、半ば気軽に引き受けた(1999: 22)」と語っている。

遠征隊に参加したのは、子供の頃からの虫好き、蝶々好きが高じた結果である。虫や蝶々への興味は中村が小学校三年生のとき、近所の古賀郵便局の局長さんに連れられて、しばしば一緒に野山を回ったことでいっそう掻き立てられ、自然の細部の美しさに開眼したという。また、幼少の頃には病弱であったが、虫を探して山歩きをすることで健康になり、振り返ればそのおかげでペシャワールで活動する体力がつき、赴任の準備となったともいう(2006: 25-26,56)。

現在にまで至る「活動の動機」について問われると、中村自身が言葉に窮するといいつつ、蝶や山に魅せられ、「遊びで行ってのっぴきならぬ事態に次々と遭遇し、足が抜けなくなったまでのことである。『エーイ、こうなったら行けるところまで行け。対峙する問題から目を背けて今更現地を見捨てて逃げれるものか』と述べた方が現実に近い」、「やむにやまれぬ大和魂ですたい」と説明している。それでも納得されなければ、「縁とでも申しましょうか」と言い換える。そんな問答を数え切れないほどしたが、決して「はぐらかし」ではなく半分は「本当なのである」という(1993: 205-206)。確かに、その通りであろう。テレビ・シリーズの第四回放映(2006/6/26)の最後の部分でも、中村は、人との出会いと繋がりが、その時々のリアルタイムでは単なる偶然であったが、後から見るとそうなる定めであったように思える、そこに人知を超えた大きな摂理あるいは神の導きを感ずる、と語っている。縁に導かれ、縁ある人々に支えられ、生かされてあるという痛切な自覚を中村はもっている。テキストの短い巻頭言も「縁――人に与えられた共通の恵み」と題して、次のように語っている。「私たち個人のどんな小さな出来事も、時と場所を越えて縦横無尽、有機的に結ばれています。そこに人の意思を超えた神聖なものを感じざるを得ません(2006: 8)[25]。」

縁によって結ばれ、張り巡らされた関係性のなかで生かされているということは、同時にそうした関係の制約を受けながら、生きるということでもある。「異文化のなかで『医療』を問う」と題したエッセーのなかで、中村は、「人間とは関係である」と言い切り、「関係とは自然と他者から受ける有形無形の制約であり、この制約の中の選択が『自由』である(2003: 104)」と明快に述べている[26]。縁によって、支えられ生かされていると同時に、それらの制約を受けながら、許された自由の範囲でより良い選択を心がけ、自身の道を切り開いてゆく、という生のあり方の

自覚は、おのずと自己の謙虚と他者への信頼を導くことになる。「現地二二年の体験を通して言えることは、私たちが己の分限を知り、誠実である限り、天の恵みとまごころは信頼に足るということです（2006: 8）。」

このように考える中村の思想、というのが大仰ならば活動と発言の大本には、常に目線の低さ、自身の卑小さに対する感覚、他者や異文化への謙虚さがある。[27] だから地に足のついた活動が可能となるのであり、逆にそのようにして現地の人々と共に活動することから、確かな実感として文化の違いを超えた人間存在の厳粛さと生の営みの尊さ、それゆえに異文化を生きる他者への共感と畏敬とがおのずと生まれてくるのである。そのことについて、中村は人間存在の核にある「神聖な空白」という表現を用いて語っている。人は、それぞれ死生観や善悪観をもっており、それは生まれ育った環境と人との出会いをとおして、さまざまに鍛え上げられ、洗練され、あるいは修飾されたり覆われたりしてゆく。そのことを重々承知し、認めたうえで、

> しかし、極端に異なる文化環境の中でさえも、その核にあるものはそう変わりがないというのが私の確信である。後光のさすイエス・キリストが現れようと、蓮の花に囲まれる仏陀が現れようと、精悍なマホメットが現れようと、はたまたそれらを一切否定する「テーゼ」が現れようと、根幹で一致できるなにものかを人間は共有している。それらの一致点をなおざりにするところに、優劣の尺度で人を審いたり、価値観のおしつけが生ずる。
>
> その「一致点」について…現地での体験から確信できるのは、人それぞれに、犯してはならぬ「神聖な空白」とでも呼べるものを共有し、それに自らの生活から滲み出た言葉で意味を与えようとする事である。謙虚さの根源は、この、人の言葉の限界と相対性を自覚することにあると私は思っている（1993b: 1993）。

まさしく、文化相対主義をふまえつつ、それを超える人間存在に関する普遍的なものに対する信念の吐露である。

五　九州（人）の思想？

中村が自ら強調しているように、人は、その縁という関係性のなかで育まれ生かされ、同時に、ある程度の制約を受けて生の形を作っているならば、中村が九州に生まれ育ったことと、その活動さらにはその信条や思想（とあえて呼びたい）には強い結びつきがあるだろう。彼は、自分が知っているのは「縁あって赴いた」パキスタン北部とアフガニスタン東部、それに九州だけであると何回も繰り返している[28]。実際、中村は福岡に生まれて玄界灘を見ながら育ち、幼少青年期を通じて、関門海峡さえ一度も越えたことがなかった。初めて新幹線に乗ったのは三三歳のときであった。その目的は、ネパールで知り合ったシェラトン・ホテル・フロント係の女性が、日本語学校に入学したいという希望をかなえるため、自ら大阪の領事館に出向いて手続をするためであった（丸山　2001: 32, 77）[29]。

もっとも土地や生育環境、交遊関係が、必然的にある思想を生み出すわけではないだろ。私自身の生育歴、成長過程を振り返って比べてみれば、多少なりとも中村と似たような境遇や経験を持つが、しかし私は、中村のように医者にはならず、ましてや、海外の弱者や貧者のために働くこともなかった。ここで考察するのは、中村が出会ったさまざまな人々や出来事・経験と、彼の思想・信条や活動との因果関係や必然性ではなく、現在かくある中村へと収斂してくるように、さまざまなエピソードを縫い合わせて小さなタペストリーを織り上げるような「物語的理解」の試みである[30]。

中村は、九州に生まれ育ち、自分が九州人であることを常に意識している。たとえば、丸山が、「なぜそこまで村人に、貧しい民に、尽くすのだろうか」といぶかしみ、率直に尋ねたところ、「これは九州人の特質かも知れませんが、そうせんと気が済まん、落ち着かん、という気持ちが第一でした」と答えている。続いて、「自分は古い人間」だから、「約束は、必ず守らなければければならないと考える」とも言っている（*ibid.* 78）[31]。あるいは、「自分は、『日本の九州島』という限られた地域、それも限られた時代で身につけた伝統や精神的気流から自由ではなかった。その枠内でしか、是非善悪、美醜の感覚を保持できなかった（1999: 346）」とも語っている[32]。

そうした、中村の昔気質は、両親から、そして母方の祖母から受け継いだものであり、とりわけ物心ついてから

の躾と教育によるところが大きい。中村自身が、ミッション・スクールの西南学院中学部に入り、キリスト教（とりわけ内村鑑三）と出会うまでの倫理観の骨肉を作ったのは、父親と祖母の威厳であったと述懐している。ふたりとも逆らうことのできない恐ろしい精神的権威であり、外面的な思想の上着は別として、ともに頑固一徹で、「曲がったことは許せん」という儒教的・日本的な道徳観で自身を律していた。中村自身もまた、『論語』が人の当然に守るべきルールを説くものとして身についたという（中村　2006b: 68）。

中村の父親は、ロシア革命に触発され、戦前は社会主義者の筋金入りの闘士として非合法活動を指導し、戦中には反戦運動をして逮捕実刑を受け、日本の国難に直面して転向を余儀なくされた経歴の持ち主であり、事業にも失敗して戦後は鬱々たる思いを秘めて生きた人物であった。自分の過去を中村に語ることはほとんどなかったというが、中村が子供の頃から、耳にタコができるほど父親から繰り返し聞かされたのは、「早く大きくなって、日本の役に立つ人間になれ、お前は親を捨ててもいい。世の中のためになる人間になれ」という教えであった（中村　1993:252丸山:81）。関係者によれば「頑固一徹、リベラリストにして国粋主義者、何より敗戦国日本が、軽薄な西洋文明に毒されて行く時代の変化に唾棄すべき屈辱感を感じていた知識人だった（丸山　2001: 269）」ようである。そうした父親だからか、「アメ公の配るチョコなど、絶対に口にするな」と子供たちを厳しく戒めていた（中村　1993: 269）。さらには、「進駐軍は日本人を歌とスポーツで骨抜きにする」と固く信じて、ラジオでジャズなどが流れると怖い顔をしてプツリとスイッチを切ってしまったという。ただし、クラッシックだけは「軽薄なアメリカ文化」という非難を免れていたので、少年時代から現在に続く中村の趣味となっている（中村　2003a: 190-191）[33]。

中村は昭和二一年、敗戦のほぼ一年後に福岡市の三笠町で生まれたが、二〇年六月一九日の福岡大空襲によって父方の祖父母をはじめ親族はほとんど亡くなってしまっていた。そのため二歳のときに、母方の親族が集まる若松に移り住み、以後、母の実家の玉井家とのつながりが強かったという。母親は富豪の令嬢に近い生活から、明日の米もない生活まで体験しても、変わらずに気さくであり続け、「故郷の北九州・若松の沖仲仕組合の気風と、父に感化された大正の社会主義、昭和のナショナリズムが奇妙に同居して、古いタイプの庶民の年輪をおもわせた（中村 1999: 334）」という。しかも天真爛漫を絵に描いたような人物であり、民権意識に目覚め、兄たちと行動をとも

にする文学青年を見初めて、押しかけ婚に近い形で嫁ぎ、その肩口には夫の名前を「勉命」と刺青していたという（丸山　2001: 265）。

母の実家の玉井家は、祖父・金五郎の時代に沖仲仕の組合「玉井組」を立ち上げ、若松港の荷役作業を引き受けて隆盛を誇り、小説『花と龍』のモデルともなった。中村は、近年、その風貌や物言いが金五郎にますます似てきたと周囲の者から言われると認めているが（『朝日新聞』2006/10/23夕刊）、彼の知る祖父はすでに老齢で、小説に描かれたような血気盛んな侠客の風はなく、酒もタバコもやらず、やさしいばかりの好々爺の印象しかないという。しかも、当時、金五郎は子供には分からぬ事情で本家を離れ、別宅にいたので、中村自身は祖母（金五郎の妻）マンとの付き合いの方が深かったという。若松での生活で、印象的に記憶しているのは、熱烈な「軍国の母」であった祖母・マンの存在感と、叔父・火野葦平という作家の生き方であったという（中村　2006b: 57-58）[34]。

祖母は、広島の郷士で武家育ちの風貌があり、そのぶん躾にも厳しい人であった。乳離れが遅かった中村は、あるとき入れ歯をはずした祖母から、「そげん甘ったれは、この歯が食っちまうぞ」と脅されたのを機に、ぴたりと乳離れしたが、そのときの恐ろしさは、今でもはっきり覚えているという。いつも本家の玄関に近い部屋で長火鉢の傍らにじっと座り、長キセルでタバコを吸っている姿は、「玉井家安泰」の象徴のようで、皆に畏怖と安堵の念を与えたという。この祖母の説教が中村の倫理観の根幹をなし、「弱者を率先してかばうべきこと、職業に貴賤がないこと、どんな小さな生き物の命も尊ぶべきこと」などは、祖母の説教を繰り返しているに過ぎないと認めている（*ibid.*: 58-59）。

中村の姉の角田共子の証言によれば、実際に、当時の玉井家は、物乞いでも平気で家に泊め、たとえお金を盗まれてもとがめるようなことをせず、子供連れの物乞いが来たら、自分の家にコメがないのに、にぎり飯や配給のチョコなどをあげていたという。人を差別せず、わけても蔑まれる階層にこそ手を差し伸べることを祖父母は当たり前のこととしていた。中村は、「厳しいが、心根の暖かい」そんなバアチャンの真似をして、「大きな湯飲みを片手にもって、夏でも綿入れ半纏を着て、壁にもたれて本ばかり読んでいる」おかしな子で、「ご隠居さん」と渾名されていたという（丸山　2001: 263-265）。

そのようにして育ち、医師となり、ペシャワールを拠点に二〇年を越える歳月を費やして活動してきた中村にとって、大きな転機がいくつかあった。ひとつは大旱魃への対処としての井戸掘りであり（「とにかく生きておれ、病気は後で治す」二〇〇〇年六月～）、ひとつはアメリカの空爆下で冬を生き延びるための食糧配布であり（「アフガニスタン命の基金」二〇〇一年一〇月～）、さらには井戸掘事業を発展させて農業による復興を目指し一五キロの灌漑用水路を建設する事業（「緑の大地計画」二〇〇二年二月～）であった。いずれも、アフガニスタンの貧しく困窮した者たちが、生き抜いてゆくために、その時々でもっとも必要とされていたものを、彼らの希求に迅速に応えて提供したのである。それぞれに経緯と苦難があり語るべき物語がある。

なかでも、もっとも多くの資金とスタッフと労力を投入した用水路建設は、今までの活動の集大成といって過言でなく、ペシャワール会の理念と実践が明快に実現されていて興味深い。常々中村は、「ペシャワールとアフガニスタンは、アジア世界の抱える全ての矛盾が見える」と述べてきたが、進歩がもたらした最大の矛盾であり世界規模で進行する根源的な問題である環境問題、とりわけ地球の温暖化の影響を直接に受けて生じたアフガニスタンの大旱魃に、ペシャワール会は正面から対峙し取り組んだのである。当初は現地の専門家・技術者十数人を雇用して建設に当たったが、必ず予期せぬ要因が加わって修正に次ぐ修正を余儀なくされ、ほとんどが音を上げて辞職し逃げ出したという。そのため仕方なく、中村は、娘さんから数学の教科書を借りて復習し、流量計算や流路設計など水工・土木学の教科書を買い入れて独学し、専門家の助言を得ながら自分で設計図面を引き、現場監督をして完成にこぎつけた。設計図は専門家の引くものとは大違いの「絵図面」であったが、むしろ字も読めない農民や石工などの現場作業員の方が事情に明るく、すっとそれを理解して作業に当たった（中村「用水路建設――音を上げた自称『専門家』」『沖縄タイムス』2004/7/25）。

その際、もっとも重要な取水口の設計に関しては、九州各地の先例を実際に現地を回って見て歩き、地形や川筋がそっくり似ている福岡県朝倉市にある筑後川の山田堰を参考にした。それは、幅一〇〇メートル、長さ二〇〇メートルほどにわたって巨石を斜めに並べて川全体を数メートル堰き上げて取水口に導水する斜め堰であった。冬季の増水に対しては堰のなかの数本の水抜き川で過度の水位上昇を押さえ、夏の大増水に対しては余水が巨石の上を越

えて流れ、異常な高水位となって堰が決壊したり、あるいは巨大な濁流が水門を超えて用水路に流れ込むのを防ぐ仕掛けとなっている。自身が時流に乗れない古いタイプの人間であることを自覚している中村にとって、先人たちの知恵と工夫に学んで今に役立てるという意味で、まさに温故知新であり、古くて一見「時代遅れ」であっても、良きものには素直に習い従い今に活かすという点で、九州の思想といえるかもしれない。[36]

六　愚直が見据える世界

しかし、ここで取り上げて考察したいのは、中村の発想や考え方の根本に九州の歴史風土があり、中村自身がそれを自覚していることのさらなる確認よりも、むしろ、そうした一連のプロジェクトの実施をとおして、中村が現地で見たアフガニスタンの庶民に生きられた世界と、現地から見えたアメリカが支配する世界の在りようとについて、彼が発言してきたことの意義と重要性である。それは、謙虚と愚直に徹したからこそ曇りなき目で見ることのできた世界の開示であり、とりわけアメリカのブッシュ政権と日本の小泉政権を痛烈に批判して、われわれに刷り込まれたアフガニスタンの現状認識の再考を導くものとなっている。

中村は、ＮＨＫ番組「知るを楽しむ」の第八回目最終回（2006/7/24）を「日本の若者たちへ」と題し、そのなかで、井戸事業と続く用水路事業で日本の青年たちが前線に立って活躍したこと、「最近の若いもん」も結構やれること、それで若者たちへの偏見を拭い去ることができたこと、などを率直に語り、だから「私は次世代に望みをかける」と表明している（2006b: 127）。そして最後に、二二年間の現地活動を通して得た「平凡な結論とメッセージである」として、次のように言っている。

> いたずらに時流に流されて大切なものを見失い、進歩という名の呪文に束縛され、生命を粗末にしてはならない。今大人たちが唱える「改革」や「進歩」の実態は、宙に縄をかけてそれをよじ登ろうとする魔術師に似ている。だまされてはいけない。「王様は裸だ」と叫んだ者は、見栄や先入観、利害関係から自由な子供であっ

た。それを次世代に期待する（*ibid.*:135）。

もちろん中村は無責任に、次世代への期待を述べているわけではない。彼自身の愚直さが、まるで子供のような目で世界を見ることを可能にし、アメリカが、ブッシュが弄する詭弁と纏う虚飾を嘘だと見抜かせ、「王様は間違っている」と発言させ続けてきたのである。アフガニスタンの現地に張りついて逃げ出さないという一途さこそが、彼に、そこで生じた戦争や内戦や自然災害を、現地の人々とともに内側から体験あるいは目撃させ、現地の「被植民者たちを表象＝代弁する（サイード一九八九）」役割を与え、アメリカと日本に激しく物申し、異議申し立てをするよう導くのである。もちろん、先にも述べたように、地域・民族・言語の違い、貧富の格差、教育の格差が人々の暮らしぶりと生活感覚や世界認識に圧倒的な差異をもたらしているため、どこの、誰の、いかなる視点かということは、決定的な重要性をもっている。外国人が短期で取材に訪れ、比較的自由に動けるカブールで英語のできる人に直接インタヴューをしても、そこから得られる情報と理解は、きわめて皮相的で片寄ったものである（中村2004: 78-79）。

しかし、そうした限られた情報にもとづく誤った、あるいは極端に偏向したアフガニスタン情勢を、日本人の記者やジャーナリストから東京の大手メディアを通して直接に伝えられると、さらには日本のメディアがアメリカの新聞記事やテレビ映像を流用したり借用したり、アメリカ政府の発表を紹介したりして間接的に伝えると、多くの日本人はあたかもそれが正しい現状であるかのように真に受けてしまう。あえて挑発的に言えば、一方的な情報の洪水に溺れて判断力を失い、ある種の洗脳を甘んじて受けているようなものである。その点について中村は、「『対テロ戦争』の虚構」と題して次のように憤慨して述べている。「九・一一テロ事件の三日後の九月一四日、外務省の勧告に従ってアフガニスタンを離れ、一時帰国した私にとって、日本中が熱病にかかったような『正義のアメリカ』対『悪の権化タリバン』という構図は、まったく理解しがたいものだった。…日本で報道されている『アフガニスタン』は、現地で接し、見聞きしたわがアフガニスタンとはあまりにも違うのである（2004: 8）[37]。」

中村の憤慨は、アメリカの報復空爆に対して、さらにその後の日本の報道や政府の対応に対して、よりいっそう

激しくなる。リアルタイムでは、会報や朝日新聞、毎日新聞などに掲載されたり、共同通信から配信されたりした十数本のエッセーが、『辺境で診る辺境から見る』のなかに「『解放』された無秩序」と題されて再録されている(2003: 57-114)。折々の中村の発言をつなぎ合わせて、その憤激の理由を察すれば、「人権を守る筈であった自由とデモクラシー」の理念が、「不朽の自由」と称する報復爆撃で民間人の大規模な殺戮を展開し、タリバン政権を打倒して治安を破壊し、混乱を徒に増幅させて、人々の安寧と生存を脅かしていることである。

中村によれば、日本でまことしやかに報道された「ピンポイント攻撃(目標――テロリストの居場所――だけを的確に攻撃して一般市民に巻き添え被害を与えない)」の実態は、無差別攻撃にほかならなかった。「ただし計画的に爆撃地区が選ばれたのは事実で、一地区を集中的に襲って人々が逃げると、今度は安全と思われた別の場所が襲われる。…上空から明らかに識別できる国際赤十字施設も直撃弾を食らって大破し、唯一残って空爆の報道を続けるアルジャジーラ放送局も破滅した(2006b: 96)。」その結果、九・一一の同時テロによるアメリカ人の犠牲者よりも多くの民間人犠牲者を出し、さらには空爆によって生存インフラが破壊されたために、より多くの餓死者や凍死者を出したのである(2003:78)。そもそも、空爆を正当化する理由は、テロリストを匿うものもまたテロリストであるという同一視の論理によるが、オサマ・ビンラディンをはじめ、九・一一テロの実行犯とされた者たち一九人のほとんどはサウジアラビア人であり、アフガニスタン人は一人もいなかった。アメリカのあと押しにより実質的には傀儡に等しい形で就任したカルザイ大統領自身が、二〇〇一年一〇月まで、アルカイダの存在そのものを知らなかったという(福元 2004: 100)。[38]

欧米や日本で報じられた抑圧的で残虐なタリバン政権というイメージとはまったく逆に、田舎に住む農民や牧民たちにとっては、タリバンは、ソ連の侵攻によって混乱し二〇年あまりも続いた戦争と内紛に終止符を打って、平和を回復し秩序を打ち立て、以前の安寧を取り戻してくれた政権であり、依るに値する権力であった。中村や福元やペシャワール会の現地スタッフも皆、タリバン政権がナチスやポルポトなどとはまったく異なり、治安を維持し、田舎の人々が普通の生活、イスラームとしてのまっとうな暮らしを送れるようにすることを目的として活動し、それを実現した点を高く評価している(中村 2001b)。

中村によれば、タリバン勢力は一九九六年にアフガニスタンの実効支配を確立して以来、一種の国粋主義的なイスラム主義で人々をまとめ上げようとしていた。そのために、鎖国主義とも呼べるような政策を採り、一切の西欧的な価値観や文化的影響を排除して、「古き良きアフガニスタン」を再現しようとしたのである。一九七八年以来、共産政権下のアフガニスタンでは、度を越えたイスラム教迫害が行われ、同時に政権の内部でも「人民派」と「戦旗派」との間で死闘が演じられた。イスラム主義を掲げる反政府党の内部でも、すさまじい内ゲバが続き、しまいにはゲリラ組織が敵政府の分派と内通して共闘するような珍事さえも見られた。タリバン勢力は、こうした混乱と犠牲者が二〇〇万人にも達する事態を平定掌握し、伝統社会の常識にもとづいて秩序を回復しようとしたのである。その点について、中村は、「タリバンの『健全』」と呼んで評価している。

確かに政権の樹立直後には、あらゆる享楽的なものが禁止され、映画、ビデオをはじめ、テレビやカセットテープまでご法度になったが、政権の安定とともに、そうした行き過ぎに対して内部批判もあり、徐々に規制が緩和されていった。カブールを陥落させた直後のタリバンは、西欧のメディアによって、「アフガニスタンを七世紀に引き戻そうとする」狂信的な反動勢力として報じられたが、むしろ一六世紀ヨーロッパで生じた宗教改革時代の清教徒たちに似ており、「二〇世紀のピューリタン」として理解するのが適切であるという。違いといえば、清教徒たちが反対派を容赦なく大量処刑したほどには残酷ではない点であり、「憎めぬ純粋主義、たとい戯画的に見えても、世界を覆う拝金主義に対する挑戦」が中村には小気味よく思え、つい弁護したくなるという（中村　2003a: 168-171）。

もちろん、そうした物言いには中村一流の諧謔があり、個人の主義主張や趣味や好き嫌いで弁護しようというのではもちろんない。彼がタリバン政権を評価するのは、現地の大多数の人々にとって、つまりカブールなどの都会に住み西欧化した生活をする金持ちではなく、都市の貧民や田舎の農民にとって、タリバン時代は北部の戦闘地域を除く国土の九割ほどで、過去にもっとも治安が安定した時期であり、未曾有の大旱魃にもかかわらず人々が安心して生活の復興に専心することができたからであった（『会報』No.72, 2002）。

またタリバン以前の、そして以後の現地の状況を知る福元は、彼らが神学生という禁欲的な集団なので、多少は鬱陶しいことはあっても、ペシャワール会の活動が妨害されたり被害にあったりしたことはなかったという。それ

以前の現北部同盟の時代には、医療用の車両が三台強奪されたり、診療所が襲撃されたり、中村のドライバーがライフル銃を突きつけられて「命と車とどっちにする」と脅かされたことがあったが、タリバン政権になってから、一切そうしたことがなくなったという。ソ連が大量の近代的兵器と八万人の兵士を派遣し内戦の泥沼を引き起こした挙句に撤退を余儀なくされたアフガニスタンの国土の九割以上を、タリバンはわずか二万数千人の軍勢で実効支配し、秩序を確立した。それが可能となったのは、彼らが治安の回復と平和を求める住民の強い支持を得たからであり、具体的には各地域の伝統的な自治組織ジルカ（長老会）を通して草の根レベルの意見集約を行い、逆に指示を伝え、イスラームにもとづく民意に即した政治支配を行おうとしたからであった（福元　2004: 123-125）。

ペシャワール会のプロジェクト拠点のひとつであるダラエ・ヌールでも、タリバンは「驚くほど住民と一体化して」おり、タリバンと住民の区別ができないほどに、「とてもいい形で政権と住民が融和している」という。たとえば、日本人ワーカーの目黒は、井戸掘りで一緒に働いていた若者が、ある日カラシニコフ銃を肩にかけて数人のタリバン兵と共にパトロール当番のために歩いているのに出くわして、びっくりしたというエピソードを紹介している。それまでダラエ・ヌールでは、大きな村ごとに武装して対立し、争いのたびに銃を用いた戦闘が起きていたが、タリバンの進駐にともない、まず銃を回収して住民の武装解除を行った。初め、反発する住民との衝突もあったが、そもそも皆が戦闘に疲れており、戦闘を終わりにさせてくれたことを喜んだという。目黒が現地のスタッフにタリバンが来て何が変わったかを尋ねたところ、内戦が始まる以前の状態に戻っただけで、実質は何も変わっていない、「昔からの習慣を彼らがわざわざ法律にしただけさ」と答えたという。そのことについて、中村は「田舎者の政権だから田舎の人には当たり前の政策」と説明している（『会報』No.69, 2001）[38]。

そうしたタリバンの理解は、日本のメディアが報道するタリバン像とは正反対のものであった。日本人のアフガニスタン理解で大きな影響を与えたのは、アメリカから発信された情報と映像であり、カブールをはじめアメリカ軍が制圧した地域を短期に取材した日本人ジャーナリストの報道であった。しかし、それらとともに、フォト・ジャーナリストの長倉洋海が、足かけ二五年におよぶ長きにわたり、北部同盟の中心的なリーダーの一人であるマスード将軍の密着取材を中心に、現地取材を繰り返し、折々に出版してきた写真集や報告の影響も見逃すことができない。

その数は再刊されたものも重複して含めれば優に一〇冊を超え、いずれも朝日新聞、岩波、新潮、河出書房新社など、東京の大手有名出版社から出されている。それらは一貫して、マスードがいかに卓越した軍事指揮官であり、心優しい青年であり、アフガニスタンの解放という理想に燃える政治指導者であったかを、美しく印象的な写真とともに伝えている。その陰画として、タリバン政権が残虐であり、オサマ・ビンラディンと手を握りイスラーム勢力を束ねてアメリカに対抗しているとして、まるで悪の権化のような描き方をしている。マスードに敵対しているタリバンは、

パキスタンの傀儡であり、…反タリバン地域を制圧すると、家と畑を焼き、男たちを連れ去ったと難民が訴えていた。娘や妻にガソリンをかけて家族の目の前で殺し、人々に恐怖感を植えつけて村に戻れないようにしたともいう。人が集まる市の立つ日を狙って爆撃を加えることもあった。…ビンラディンたちは、現在のイスラムを堕落に追い込んだ責任は米国にあると考え、世界のイスラム教徒一二億を過激な異質なイスラムに染め上げることで米国に対峙しようとした。ビンラディンとタリバーンにとってアフガニスタンはそのためのジャンピング・ボードであり、その大義の前には、アフガニスタンの民衆は犠牲になってもいいと考えていた。…

当時タリバーンを政権として認めていたのはパキスタン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦の三ヶ国のみだった。国連の議席はマスードたち旧暫定政権側が握っていた。タリバーンの支配が続く中で、麻薬での資金つくりや国内での女性抑圧、パシュトゥン族以外への虐殺などが明らかになっていた。さらに、バーミアンの石仏破壊も国際的孤立に拍車をかけた(2001b: 270-271)。

食糧を待っている女性の一団に近づくと、女の子がわっと駆け寄ってくる。「いま、どんな気持ち?」と聞くと、「とてもうれしい。タリバーンはすぐ叩くから嫌いだった。今はやっと監獄から出られたような気分。本当にうれしいのよ」という。…「早く学校に行きたい。お医者さんになるのが夢なの。」(長倉 2002a: 52)

ここに示されているアフガニスタン理解は、ブッシュ大統領の「不朽の自由」作戦の正当化の理由と同じであり、

二〇〇一年当時に私自身がテレビや新聞、雑誌で読んでいたものと同じであり、それらを要約して提示されている印象を受ける。[40] しかし、この文章のなかにもすでに幾つかの誤解や無理解がある。たとえば麻薬の原料となるケシ栽培に関しては、タリバン政権は当初、取締りの余裕がなく黙認していたが、国際的な圧力やイスラームの教えに反することからすぐにケシの栽培を禁止し、強制的な刈り取りと監視を行った。その結果、世界需要の半分に相当する年間四千トンほどのアヘンを生産していたのが、二〇〇一年には一八五トンにまで激減し、アメリカの麻薬担当局がタリバンを称賛したという。しかし、タリバン政権の崩壊とともに、また一斉にケシ栽培が復活してしまったのである（福元　2004: 75）。

女性の教育についても、水源確保事業を担当してプロジェクト・サイトを走りまわっている目黒は、タリバンの僧侶と井戸の交渉を行った際の体験として、次のような僧侶の発言を紹介して、タリバン政権も女性の識字教育は必要だと認めていることを報告している。「字が読めなくてはコーランも理解できない。識字教育は絶対に必要だ。だけどその前に、治安が安定することと最低限の生活水準を保証することが必要だ。」そしてアフガニスタン北部でNGOが作った女学校が焼き討ちされたのは、女学校自体よりも、地元の理解を得ずに一方的にやった結果だろうと推察している（目黒in中村　2004: 182）。

二〇〇一年三月のバーミヤン石窟の破壊について中村は、現地で見聞するかぎり、その背景には内戦・旱魃・国連制裁など、アフガニスタンを襲った一連の出来事が深く関係しているという。その前月に、バーミアンを中心とする地域に拠点を持ち、同じシーア・イスラームであることからイランが後押しするハザラ軍閥と、タリバン政権とのあいだで大規模な戦闘が生じて、タリバン政権側の気が立っていたこと。アフガニスタンでは、「天災は神の怒り」と信じられており、未曾有の旱魃に対処するために偶像を破壊して精神的高揚をはかろうとしたこと。そして、国際的認知を求めて国連機関の存在を許してきたが、旱魃への救援どころか、逆に国連制裁に踏み切った国際社会に対して態度を硬直化したこと、などの要因が絡み合った結果であろうという。

しかし、旱魃の被害と、国際救援の実態をみてきたペシャワール会＝PMSでは、生身の人間の生き死によりも、死んだ遺跡に執着することの方が、ずっと異様に思えたという。自身が浄土真宗の僧職を継ぐべき身であり、バー

ミャン石仏に強い憧憬を抱いていた蓮岡が、仏跡破壊を非難する世論を知り、「釈迦が生きておれば何と述べるか、見ものである。頽廃した仏教の改革もせず、衆生救済の大乗の教えを忘れ、石の彫像に執着するのは仏教精神ではない」と喝破したことを紹介し、中村は「これが恐らく、最もまっとうな意見である」と述べている。ただし、現地のほとんどのイスラム教徒は仏跡の破壊に批判的であり、「タリバンはやりすぎです。イスラムはそんな狭い教義ではありません」というPMS病院のイクラム事務長の言葉を、現地の良識を代表する意見として紹介している。しかし、同時に、現地のガンダーラ仏がとんでもない高額で取引されており、暴利を貪る者が後をたたず、「仏跡」が腐敗に貢献した事実についても言及している（中村　2001a: 170-174）。

さらに中村は、長倉に代表されるような東京発のアフガニスタン情勢の報道とはまったく対立する現状理解を、簡潔に、しかし抑えても隠し切れない憤怒の情を交えながら、福岡のペシャワール会と石風社を通じて発信しつづける。それはアフガニスタンの現地に身を置くものの、実際には「安全」を保障してくれるアメリカ軍と共にあるいはその後ろからアメリカ人と同じような眼差しで現状を見るのではなく、その逆に、大砲や機関砲や小銃の先が向けられているタリバン勢力を支持してきたアフガニスタンの田舎の貧しい農民の側の視点に身を寄せることで、おのずと見えてくる現実であり現代世界の在りようである[41]。すなわち、それは、アメリカが直接に軍事介入してくる以前から、一貫してパキスタンとアフニスタンの辺境で病者を診療し貧者を助け、彼ら彼女らの「肩越し」からアフガニスタンの現状と、それを背後から動かす力を見据えてきた中村の一徹さと愚直さが導き教える真実である。真実が言い過ぎであるならば、少なくともアフガニスタンで圧倒的な多数を占める農民の大多数に共有されている現実認識である[42]。

中村は、アメリカの報復攻撃が始まろうとしている直前に、次のように言い、空爆後に予想される事態に対して、深い危惧と憂慮の念を示していた。「『自由と民主主義』は今、テロ報復で大規模な殺戮戦を展開しようとしている。おそらく、累々たる罪なき人々の屍の山を見たとき、夢見の悪い後悔と痛みを覚えるのは、報復者その人であろう（『会報』No.69, 2001）。」そして実際、空爆後に生じた事態を見据えて、次のように総括している。「タリバン政権の崩壊は、取り返しのつかぬ無秩序と、人々の苦境を生み出したといえる。解放されたのは、麻薬栽培の自由、

餓死の自由、アフガニスタン人が誇りを失う自由である（『会報』No.71, 2002）。」同様なことを別の箇所でも繰り返す。「人権を守るはずであった自由とデモクラシーが混乱を徒に増幅し、人々の生存を脅かしている。タリバンの『圧制』から女性の権利を解放する筈であった戦いは、物乞いの寡婦たちを激増させ、外国兵相手の売春の自由まで解放してしまった。農村社会と遊牧社会ではごく当然の子供たちの手伝いが、抑圧された『小児労働』として、人権侵害の烙印を押された（中村　2003a: 107）。」

そもそも中村はマスードに関し、彼自身の理想や人格はさておき、軍事指導者としては、部下を掌握統制できず、結果として治安の維持ができなかったこと、とりわけカブールにおいて部下が掠奪や強姦をし放題なのを黙認していたことに対しての結果責任を追求する。一九八九年のソ連軍の撤退後、内戦に勝利し、ナジブラ政権を倒して一九九二年にカブールを占拠し暫定政権を打ちたてたマスードやラバニなどの軍閥は、互いに対立割拠して内戦を激化させ、タリバンが登場するまで完全な無政府状態に陥れたのであり、「マスード・ファン」はその点の認識を欠いていると批判している（2004: 19-20）。

「BBC・ヒーロー」のマスード…個人は確かに開明的で、欧米筋に人気があった。だが、現場のわが方から言うと、あの旱魃の最中にその混乱に乗じるように、グラエ・ヌールを戦場にしたのは許しがたい。その上、戦闘員ならともかく、こともあろうに作業中のカーレーズに地雷を埋設して四名の農民が爆死、作業を遅らせた。我々には面白かろうはずがない。さらに、マスードの部下が、タリバンの進駐前のカブールで婦女暴行をほしいままに行ってひんしゅくを買っていた事実を、どれだけの「マスード・ファン」が知っていただろうか。マスードに統治能力はない（中村　2001a: 131）。[42]

そして、おそらくマスードと長倉のことを想定しているであろうが、早くは、その一〇年ほど前に、「遠い日本には、この状況（米ソの代理戦争としての内戦の実情）はほとんど伝えられなかった。冒険好きな写真家やルポライターがいかに命懸けで事情を紹介しても、僅かな情報から天下国家を論ずる無責任なものとなり、接触した党派

ゲリラの勇壮さのみが徒に伝えられた。シルクロードの異国趣味と大差なかった（1993b: 18）」と、辛らつな評価を下している。

七　丸腰から放つ礫

「誰もが行かぬから、我々がゆく。誰もしないから、我々がする」は、「三無主義」とともに、ペシャワール会が掲げる活動理念であり、時代遅れの偏屈者と自覚する中村にとっては、「まるでコタツの火種のように、心の奥から自分を暖める力となっている。」この言葉は、中村が若いころに読んだ内村鑑三の『後世への最大遺物』のなかで、アメリカの女学校の設立者であるメリー・ライオン女史の創立精神を紹介したくだりのなかにあるという。その趣旨は、自分たちが生かされているこの世界に、何かお礼を置いて逝きたいというのは清らかな欲望であり、その何かはカネでも、事業でも、農業でも、文筆の才でも、何でもかまわない。しかし不運にしてそうしたものに恵まれない場合には、誰もができて他の誰にも真似できない、後世に残せる最大の遺物として、各自の生き方そのものがある。すなわち「置かれた時と所で、諸君の生きた軌跡が人々の励ましや慰めとなること」が、誰もがその気になればできる最大遺物であるという。

中村自身は内村の信奉者ではないと断ったうえで、しかし時の不条理に挑戦して止まなかった内村の精神と行動を端的に示すこの言葉に励まされてきたといい、その精神こそが真の「大和魂」というものであろうという。一九九八年に新築なったＰＭＳ病院にひるがえった日章旗は、法律で定められたものではなく、まさに真の「大和魂」を表す言葉とともに、中村をはじめとする日本人スタッフが矜持をもって掲げたものなのだという（2003a: 188-189）[44]。また中村は、二〇〇六年九月二五日現在の最新刊『丸腰のボランティア』の「まえがき」のなかで、現地に派遣したワーカーの資質に関して、その動機を問わず、「使える、使えない」という技量や能力だけで評価することをせず、むしろ、「いかに誠実に任務と関わり、自分の先入観を克服していかに虚心になりうるか、日本人としてのまごころと心意気、素朴な人情を買った」という（2006c: 9）。

中村の言葉の端々に、日本人であることの自覚あるいは心意気が表れている。彼自身が「頑迷な保守的人間」であると認めているように、彼の考え方は、いわゆる世間一般の常識にしたがえば、左翼よりも右翼、リベラルや革新であるよりも、保守であると評されるであろう。しかし中村が日本人であることを強く自覚し、誇りに思い続けてきたのは、日本の国威・国力や政治力のゆえではなく、その逆の「政治性のない日本」に対する現地の期待と信頼を強く感じ、またそれゆえの親日感情に守られて活動を続けることができたのを痛感しているからである。彼がアフガニスタンでの活動を始めた当初は、西側諸国の「援助活動」は豊富な物量と人材、対応の迅速さ、体を張って活動する様など、目を見張るものがあったという。しかし、現地に長く滞在するにつれて、そうした欧米の政府援助機関やNGOのなかには、現地の伝統文化を見下げ、「援助屋」として優越感をちらつかせる人たちがいたり、センセーショナルな注目と報道が集まるときだけ派手に活動し、世界の関心がなくなれば風のように消えうせたり、CIAから活動資金を提供されていたりするものが多く、ほとんどの「援助活動」が政治や経済の利害と密接に結びついていたりすることを知悉するに至る。

だから、と中村は強調して言う。「日本国民も政府も、だまされてはいけない。多少救援競争に後れをとったからといって、劣等感を持つ理由は何もないのである。少なくとも、武器輸出を禁じ、政治的かかわりを意図的に避けてきた『日本人の消極性』を誇るべきである。…現地で『政治性のない日本』(は)、絶大な信頼を獲得し、…称賛と好意の対象であった(2003b: 37-38)。」

そもそも援助活動というのものが、たとえ善意にもとづいて人々の生活の質の向上や改善に役立とうとするものであっても、その本質は現地の人々の暮らしと社会への一方的な介入にほかならない。そのことを中村は強く自覚自戒し、政治的な動きや策謀には一切関与せず、巻き込まれないように細心の注意を払っている。それでも時には運悪く、現地の派閥の対立やもめごとに巻き込まれたり、逆恨みをされたりして、相手が武器を用いて威嚇してくることも一再ならずあった。しかし、そんなときでも中村は、武器を用いて対抗して争いを拡大することを徹底的に避けてきた。ガンジーの非暴力主義とも通じる姿勢を一貫して保ち続け、それが揺らぐことはなかった。

具体的な例として、たとえば、一九九三年一〇月、悪性マラリアの大流行への対処のための活動中に、ダラエヌー

ルの診療所で起きた発砲事件への対処を紹介できる。夜の七時頃に診療所の門を激しく叩いて「急患」としてやってきた男は、一ヶ月ほど前から腰が痛いと訴えるに過ぎず、しかも三名の付き添いがライフルを背にしていた。診療所に入るときは携行する武器を門衛に預ける規則になっていたが、それを無視して強圧的な姿勢で診療を要求した。そのとき、内戦時代にそのグループに仲間を多数殺されていたスタッフの一人ヤコブが、門衛と押し問答する一団に割って入り、ライフルを携行している一人を殴り倒してしまった。知らせを受けて駆けつけた中村は、にらみ合いを続ける数十名の住民と病院スタッフのあいだに分けて入り、ヤコブを引き離した。それでいったん騒ぎは収まったが、それから一時間ほどして八時には診療所が包囲され、土塀に弾丸が打ち込まれ始めた。

ヤコブは応戦を主張したが、中村は、本来の目的である「無医地区診療計画」の頓挫を避けるために、ヤコブを押しとどめ、応戦して発砲することを禁じた。ヤコブが「全スタッフ皆殺しになってもですか」といきり立つのを、「そうだ。皆殺しになってもだ！」と一喝して制止した。そして「我々は人殺しに来たのではない。人の助命に来たのだ。…鉄砲で人を脅すは卑怯者だ。しかし、それに脅えて対抗するのは臆病者だ。そして諸君の臆病で迷惑するのは、罪のない多くの病人たちなんだ」と言葉を続けた。一八名のスタッフは冷静さを取り戻し、逆に相手も診療所内の沈黙に拍子抜けして、却って不気味に感じたのか、次第に銃声が遠のき、三〇分ほどで止んだという。翌朝、地区の各村の村長および郡長が来て、前夜の銃撃を陳謝し、診療所の活動の継続を陳情した。中村は、具体的な安全対策を求め、また住民患者が診療所の規則を厳守することの保障を求め、それらが履行されない場合にはいつでも二四時間以内に撤退することを断言した。要求はきわめて妥当なもので、長老たちも受け入れ、翌朝からは混乱が消失して外来診療が整然と行われ、各村はあげて協力的態度を示すようになったという。中村の毅然とした態度と意を尽くした説明、そして長老たちの威厳と威光のゆえである（1999: 144-153）[45]。

あるいは、一九九五年八月、クナール河上流の診療所に職員と物資を輸送中に一一人の武装集団に襲われてジープを奪われたことがあった。怒った病院の職員の一人が自分の属する部族を動員したために、ダラエ・ピーチ診療所から徒歩一時間ほどの村に住んでいた首謀者は身動きできなくなり、復讐を恐れてほとんど家に閉じこもって出歩かなかったという。やがて二年、三年たって、診療所への信頼感が確立すると、その首謀者は、地域住民たちか

ら白眼視されるようになり、名誉を失ってしまった。かの地では名誉の失墜こそが最大の恥辱であるから、それによって十分な復讐を果たす結果となった。しかもその村の下流までタリバンが進駐してくると、賊の方は告発されないよう診療所との友好関係を保つのに懸命となった。だから「要は負けるが勝ち、気短にならぬことだ」という（中村　2003a: 174-175）。

そうした非武装の姿勢に加えて、「日本人であるがために命拾いしたとか、単に日本人であるために仕事がうまくいくようになった、とかいうことはそれこそ数知れずありました（中村　2006a: 26）」という。アフガニスタンで日本という国と日本人が好感をもたれ尊敬もされている理由について、中村は、ひとつは日露戦争でロシアに勝利した（少なくとも負けなかった）こと、ひとつは二つも原爆を落とされた壊滅的な敗戦から再び経済復興をとげたこと、そして三つ目には経済大国になった後も、他国への武力介入を行わなかったことであるという（中村　2006a: 26&33）。アフガニスタンにおける中村の非暴力に徹した活動と、日本の戦後の武力不行使・不介入の外交政策とは、重なり合い互いを支え合いながら日本の良き印象を強化してきたのである。

しかしながら、アメリカがアフガニスタンへの空爆に続いて、イラクのフセイン政権を打倒するために軍事侵攻をしたとき、小泉首相がそれを支持し、さらにはサマワに自衛隊を派遣したことにより、戦後一貫してきた武力不介入の大原則が破られたのである。イラク派兵が直前に迫った二〇〇三年一一月一二日、中村は一時帰国している日本から、ペシャワールで留守を預かる藤田と橋本に宛てて、ペシャワール会の設立二〇周年記念の行事を中止にしたこと、現地では日章旗やJapanの文字をすべて消し、PMSだけを名乗って、政府とは無関係であることを折に触れ現地の側に示すこと、用水路建設に専念して工事をスピードアップすることを指示している（中村　2004: 456-457）[46]。病院に日章旗を高く掲げ、ジープには日の丸を描いているといえば、日本人はすぐに右翼団体を想像するだろうと中村自身が認めているが、イラク侵攻を日本が支持するまでのそれは、現地の親日感情を利用し、反米感情から生まれるテロ行為のとばっちりを避けるための手段でもあったという（2003a: 124-125）[47]。

ペシャワール会の現地ワーカーの活動報告を一冊にまとめた本のタイトルは『丸腰のボランティア――すべて現地から学んだ』（二〇〇六）である。この丸腰と言う言葉が、中村とペシャワール会の活動方針を的確かつ象徴的に

示している。その「あとがきに代えて」のなかで福元は、ＰＭＳは本来医療チームであるが、水が無ければ人は生きてゆけず病気をすることさえできないため、二〇〇〇年以降は水の確保に最大の力を注ぎ、これまでに一、四〇〇本以上の井戸を掘り、全長一三キロの灌漑用水路の四分の三ほどを完成させたことを報告している。ＰＭＳの用水路建設の現場の横では、アメリカの援助を受けて初めはトルコの企業、現在はインドの企業が請け負って、道路の建設工事を進めている。彼らは完全武装した民兵に護衛されているが、これまで数回にわたって襲撃を受け、作業員が拉致・殺害されたりしたが、対照的にＰＭＳの非武装・丸腰の現場では、一度も襲われたことがないことを強調する。その理由について、丸腰で政治的思惑を伴わないこうした支援事業こそが、人々の暮らしと治安の安定を底支えしているからだという。具体的に福元が列挙している理由は以下の五点である（中村　2006c: 393-394）。

事業は、①一日約千人の失業対策事業になっている。②千人にはそれぞれ約五～一〇人の家族がいるので、数千人の生活が支えられている。③灌漑用水路が完成すれば約一〇万人の暮らしが成り立ってゆく。④もしこの事業がなければ、人々は軍閥や米軍の傭兵になるか難民になるかしかなく、治安の不安定化につながる。⑤このような事業が日本人への信頼につながり、結果として軍事力に頼らない日本人の「安全保障」になる。

今まで繰り返し確認してきたように、そして中村が同書のなかで改めて述べているように、ペシャワール会の方針は、「現地と一体となり、苦楽を共にする」ことにあり、「徹底した現場主義」である（*ibid.*10-11）。現場主義を貫くことは、現地で何が必要とされ、何が実際の役に立ち、求められているかについて、そこで暮らす人々の声に耳を傾け、その立場に身を置いて考え、その希望や要請を最優先することであり、そして日本に帰っても、その立場から首尾一貫して考え、行動し、発言することである。したがって、中村が、現地での自身の経験をふまえ、人々の声を傾聴し、その結果、自衛隊の海外派兵に反対し、憲法九条を守ること主張するに至ったのは、きわめて当然の成り行きである。中村自身とペシャワール会のワーカーたちが身をもって実践してきた「丸腰のボランティア」こそは、日本が貢献しうる非武装の国際民生協力の参考あるいは手本や鑑となるべきものとなる。[18]

アフガニスタンでの事業を行うことによって、中村は、「少なくとも私は、世界中を席巻している迷信から自由でいられるのです」と感謝の気持ちを込めて断言する。世界中の人々が囚われている迷信とは、「一つには、お金

さえあれば幸せになれる、経済さえ豊かであれば幸せになれる」というものであり、「もう一つは、武力があれば自分の身を守れる、という迷信」であるという。前者の迷信に対して、アフガニスタンの貧しい人々が明るく、豊かなはずの日本の人々が暗く、自殺者が年間三万人もいるという異常さは、いったい何なのだろうかと問いかける。後者の迷信に対しては、幸いにも自身の実体験をとおして、自由になることができたという。そして、日本経済を活性化して羽振りのいい国にするために、米国との同盟関係をさらに強化し、そのために憲法九条を改正して武力行使を可能とする近年の動きに反対して次のように述べている「経済の活性化が、人殺しをしてまで豊かさを守ろうとすることならば、少なくとも私は豊になりたいとは思いません」(中村　2006a: 50-51)。

中村の愚直さと現場主義にもとづく実践、そして発言は、アフガニスタンの辺境から、今の日本の虚妄を打つ礫となるのである。

八　おわりに

中村医師が放つ礫は、国際機関やNGOの「援助屋」、欧米中心の価値観に囚われ無自覚に進歩や近代化を礼賛する者たち、アメリカのブッシュ政権と日本の小泉政権、そして私自身にも向けられていることを自覚したうえで、それに応答しつつ、その思想と実践について、理解と納得を得ようと試みてきた。多くの言葉を費やしたが、正直に言って、それが十分に達成できたという確信はない。言葉を変えていえば、本稿で試みたのは、中村の活動と発言とそれを導く経緯や背景を一枚の絵のように描くことによって、その全体像を明らかにすることであった。何とか絵が出来上がったものの、この絵の構図が、バランスよく中村の人となり、生き方、思想、等々を活写できたのか、氏のメッセージを深く受け止め、正しく理解できているのか、精一杯の力を尽くしたが自信はない。結論として主張したり、まとめとして言うべきこともない。すべて本文中で論を尽くしたつもりである。足りない点があるとすれば、その理解が次に私の実践とどう関わってくるかの省察である。重い課題であり、今はまだ答えられず宿題として残された。

ひとつ残念なのは、中村を論ずることだけで紙幅が尽きてしまったために、ペシャワール会の活動について、その素晴らしさと意義について、ほとんど取り上げられなかったことである。ペシャワール会についても、ぜひ別稿で論じたいと思う。

［参考文献］

川端清隆　二〇〇二『アフガニスタン――国連平和活動と地域紛争』みすず書房。

ギアツ、クリフォード　一九八七［一九七三］『文化の解釈学Ⅰ Ⅱ』岩波書店。

――　二〇〇二『解釈人類学と反＝反相対主義』みすず書房。

サイード、エドワード　一九八六［一九七八］『オリエンタリズム』平凡社。

――　一九九五［一九九四］『知識人とは何か』平凡社。

――　一九九八［一九八九］「被植民者たちを表象＝代弁すること」『現代思想』Vol. 26-7.

三枝義浩　二〇〇四『アフガニスタンで起こったこと――不屈の医師・中村哲物語、汚れた弾丸――劣化ウラン弾に苦しむイラクの人々』講談社ドキュメントコミック。

清水　展　一九九七「NGOと異文化共生―ピナトゥボ・アエタ開発援助の事例から」梶原景昭（編）『講座・文化人類学』岩波書店。

――　二〇〇三『噴火のこだま―ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会。

セン、アマルティア　二〇〇〇［一九九九］『自由と経済開発』日本経済新聞社。

――　二〇〇六『人間の安全保障』集英社新書。

チェンバース、ロバート　一九九五［一九八三］『第三世界の農村開発――貧困の解決――私たちにできること』明石書店。

――　二〇〇〇［一九九七］『参加型開発と国際協力――変わるのは私たち』明石書店。

中村　哲　一九九〇『ペシャワールからの報告――現地医療現場で考える』河合文化教育研究所。

――　一九九二［一九八九］『ペシャワールにて――癩そしてアフガニスタン難民・増補版』石風社。

――　一九九三a『アフガニスタンの診療所から』筑摩書房。

――　一九九三b『ダラエ・ヌールへの道――アフガニスタン難民とともに』石風社。

――　一九九九『医は国境を越えて』石風社。

――　二〇〇一a『医者井戸を掘る――アフガニスタン旱魃との闘い』石風社。

中村　哲　二〇〇一b「報道されないタリバンの素顔」『中央公論』十二月号。
——　二〇〇一c「難民を出さない努力こそ必要」『世界』十二月号。
——　二〇〇二a『ほんとうのアフガニスタン——一八年間「闘う平和主義」をつらぬいてきた医師の現場報告』光文社。
——　二〇〇二b『中村哲さん講演録——平和の井戸を掘る』ピースウォーク京都。
——　二〇〇三a『辺境で診る、辺境から見る』石風社。
——　二〇〇三b『医者よ、信念はいらない　まず命を救え！アフガニスタンで「井戸を掘る」医者・中村哲』羊土社。
——　二〇〇三c「アフガン空爆はまだ続いている」『潮』七月号。
——　二〇〇三d「アフガン復興、その伝わらざる『現実』」『論座』九月号。
——　二〇〇四『空爆と「復興」——アフガニスタン最前線報告』石風社。
——　二〇〇五『中村哲さん講演録・平和の井戸を掘る——アフガニスタンからの報告』ピースウォーク京都。
——　二〇〇六a『カラー版　アフガニスタンで考える——国際貢献と憲法九条』岩波ブックレット。
——　二〇〇六b『アフガニスタン・命の水を求めて——知るを楽しむ、この人この世界』日本放送出版協会。
——（編）二〇〇六c『丸腰のボランティア—すべて現場から学んだ』石風社。
長倉洋海　一九八四『渓谷の獅子——司令官マスードとアフガニスタン戦士たち』朝日新聞社。
——　一九八九『若き獅子マスード—アフガニスタン一九八三—一九八八』河出書房新社。
——　一九九二『フォト・ジャーナリストの眼』岩波新書。
——　二〇〇一［一九九二a］『マスード——愛しの大地アフガニスタン』河出書房新社。
——　二〇〇一［一九九四b］『マスードの戦い』河出書房新社。
——　二〇〇二a『子どもたちのアフガニスタン』岩波ブックレット。
——　二〇〇二b『獅子よ瞑れ——アフガニスタン一九八〇—二〇〇二』河出書房新社。
——　二〇〇二c『アフガニスタン敗れざる魂——マスードが命を賭けた国』新潮社。
浜本　満　一九九六「文化相対主義の代価」清水昭俊（編）『思想化される周辺世界』講座文化人類学第一二巻、岩波書店。
初瀬龍平　二〇〇五「グローバル化時代のアジア主義——中村哲の場合」『現代社会研究』八号。
福元満治　二〇〇四『伏流の思考——私のアフガニスタン・ノート』石風社。
ペシャワール会（編）　二〇〇四『ペシャワール会報——一九八三—二〇〇四合本』石風社。
マーカス、ジョージ＆マイケル・フィシャー　一九八九［一九八六］『文化批判としての人類学』紀伊国屋書店。
丸山直樹　二〇〇一『ドクター・サーブ——中村哲の一五年』石風社。

吉田文彦『「人間の安全保障」戦略――平和と開発のパラダイムシフトをめざして』岩波書店。
ラシッド、アハメド　二〇〇〇『ラリバン――イスラム原理主義の戦士たち』講談社。
Hobert, Mark 1993 "Introduction" in Hobert, Mark (ed), *An Anthropological Critique of Development*, London: Routledge.

註

(1) 本稿を書く直接のきっかけは、九州大学P&P「九州の思想」(二〇〇四－二〇〇六)の最終年度の報告書のためであった。私自身、十数年にわたり、中村医師とペシャワール会の活動に触発され啓発され挑発されながらも、今まで傍観者でありつづけた。しかし、「九州の思想」プロジェクトの一貫として、玄洋社からペシャワール会へと至る、福岡の思想の水脈を考えてみたいと思って勉強してきた。しかし玄洋社にまで遡って論ずることは、現在の私の力量をはるかに超えており、将来の課題として残されている。今回は、そのなかで、中村医師とペシャワール会の実践に限って考察しよう、正しくは、中村医師の礫に蛮勇をふるいあえて応答しようとした。

(2) それに、そもそも「グローバル化時代」という時代認識に対して、中村やペシャワール会が同意するかどうかは疑わしい。たとえば福元は、「グローバリズムと骨董品の国」と題したエッセーのなかで、「金融・情報とテクノロジーで世界を根こそぎに均質化するグローバリズムの嵐の中にあっても、その軽佻浮薄に頑固に馴染まないアフガニスタンの風土と民衆が骨董品的に美しいのである。私たちペシャワール会も美しくないが骨董品的である(福元：28)」と述べている。アフガニスタンと同様にペシャワール会もまた骨董品のように古くて時代遅れであるという自己認識あるいは自己規定は、しかし二〇年近くものあいだ活動を続けている事実から考えれば、むしろ「軽重浮薄」なグローバリズムの方が誤っていると異議申し立てをしているに等しい。少なくとも初瀬が含意しているように、グローバル化に対応だか順応してペシャワール会が「トランス・ナショナルなアジア主義」へと変身変貌したなどということは決してない。

(3) 中村はその次の頁で、自身を派遣したキリスト教の団体と、太平洋戦争のときの大本営とが、ともに「非常に日本的な体質」を有しており、自分たちの理念と方針に合致するものだけを優等生として遇し、合わぬものは冷遇する弊のあることを指摘している。そのため、「いかに非現実的でも、日本側で説得力のある論理のみが力をもち、現地事情はその色眼鏡で解釈される。現地情報は従となり、東京側の的外れな決定が時差ぼけのように重々しく伝えられ…とうてい対処できるものではない」と批判する。

(4) 一九九八年秋から二〇〇〇年初頭にかけて行った取材にもとづき、丸山は、まず山岳情報誌『山と渓谷』の一九九九年五月号から二〇〇〇年五月号まで一二回にわたり、「人間の良心―中村哲とペシャワール会」と題して連載している。その間、一九九六年の二月に二週間、六月に四週間をかけて現地を訪れ、時に日中の気温が五〇度を超えるような猛暑酷暑のなかを、中村に同行して

活動の現場を見て回り、親しくインタビューをしている（丸山：106）。

（5）抹消神経が麻痺したらい患者は、足の小さな傷から細菌が入って腫れて膿んでも、痛みがないために気づかずに放置し、最悪の場合には足の切断を余儀なくされることもある。それを予防するためには、患者の足に合った安価で履きやすいサンダルを履き、傷を作らないことがもっとも有効な対策となっている。

（6）九・一一のテロでは約三千人の死者が出たが、アフガニスタンの空爆では、一般の市民を中心に、その数をはるかに超える犠牲者が出た。

（7）中村は、三歳にして文字が読め、小学校で論語を読破していたという（丸山：263）。

（8）ダビデの物語は、旧約聖書の「サムエル記」一七章に詳しく記されている。ダビデは羊飼いの息子として、父を助けて羊の番をするイスラエルの青年であった。ペリシテ軍と戦っている兄の陣中見舞いに食糧を届けに出かけた際、戦線が膠着しており、戦争の決着をつけるため、ペリシテ軍は両軍を代表する戦士による一対一の決闘を提案し、四〇日にわたり、巨人ゴリアテがイスラエル側を激しく挑発していた。その巨躯に畏怖したイスラエル兵が、誰も名乗りを上げないのを見て、ダビデは王に自分が決闘で対決することを申し出た。王はダビデに鎧を着せ、剣を持たせたが、小柄なダビデには、それらを身につけたまま歩くこともできず、すぐに脱ぎ捨てて丸腰で、ゴリアテに立ち向かっていった。その武器は、羊を襲う狼と闘い追い払うための投石器を用いて投げつける小石である。中村がつい先日に出版されたばかりの編著のタイトルを『丸腰のボランティア』と題したこと、中村を支える福元が代表となっている出版社の社名が石風社であることも、ダビデと石の礫を想起させた一因である。

（9）数年前までは、馬場病院の院長の理解と支援のおかげで、一年のうち数ヶ月を同病院で働き、給料を得ていた。

（10）たとえば、一九九八年度のノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センは、新しい開発や国際協力の理念を提示し、実際の開発プロジェクトの立案と実施にも大きな影響を与えているが、彼は、まず、「開発の基本的な目的を所得や富の最大化であると見ることは、まったく間違っている（2000: 13）」と批判する。それに代わって、「開発とは、人々が享受するさまざまの本質的自由を増大させるプロセスである」と定義し、「人が自ら価値を認める生き方をすることができる自由」を「潜在能力」と呼び、それを高め発揮することこそが開発の目的であるとする。自由の内容が、ブッシュ政権が掲げて押し付ける自由とはまったくの大違いであることをふまえたうえで、中村とペシャワール会のしてきたことが、まさにセンが主張したことの先取りであったことを強調したい。

（11）たとえば、現在に至るまで、一五年を超える現地活動を続けている看護婦の藤田は、一九九〇年に着任した初期の頃、中村医師から現地優先の方針を厳しく言い渡されたという。彼女は、自身の心情の率直な吐露とともに、次のように証言している。「私はスタッフにたくさんの不満を持っている。どうして、もっと仕事をしないのか、から始まって、責任感がまったく無い、縦横のつながりがない、協力しあわない、同僚を褒めたり、かばったりした言葉を聞いたことがない、などなど。日本で、がっちりしたチームで働いてきた私は、自分の身の置き場に困り、いつまでもふらふらしている気分になった。この中で、中村先生は、『現地のスタッフを主として、外国人は脇役で』といわれる。そして、昨年は『日本人だけで仕事をしている。現地の人と共にやれ。あなた

たちが主役ではない』と厳しいお叱りをうけた（『会報』No.32, 1992）。」

(12) そうした主張の先駆けのひとりがホバートであり、彼は地域の知（ローカルノレッジ）の復権を主張した。地域の知とは、抽象的で普遍を装う一般的な知ではなく、人々の暮らす特定の場所や状況と密接に結びついた実践的な知識を意味している。それを開発のために活用することは、すなわち、人々を開発の対象とするのではなく、その中心的な実行者とすることである（Hobert, 1993）。

同様な主張をチェンバース（一九九五）も述べる。すなわち、農村開発においては、外部の計画・実施者＝アウトサイダーと農民との力関係を逆転させること、さらには最も貧しく抑圧されながら、四輪駆動のジープで日帰りの現地視察にやってくるアウトサイダーには見えにくい人々にこそ最大の配慮と恩恵と力を与えること、すなわち「最後に置かれている者たちを最優先すること（Putting the Last First）」の原則を強調するのである。チェンバースは、近著においては、その立場をさらに一歩進めて、開発専門家の側にこそ問題があり、事態の根本的な改善のためには「最初の人たちを最後にすること（Putting the First Last）」という原則を主張する。それは制度としての開発のなかで、専門家として「権力を持つ人たちが階段を降りて座り、最後にいる弱い者たちの言葉に耳を傾け、最後にいる者たちから学び、最後にいる人たちにエンパワーする（権能を与える）ことを意味している（2000: 38）」。

(13) そもそも「人間の安全保障」とは、アマルティア・セン博士が以前より主張していた開発理論に基づき、国連開発計画（UNDP）が一九九四年に提唱した新しい概念である。日本政府も積極的に取り組んでおり、国連に「人間の安全保障」基金を設置したほか、国連難民高等弁務官を二〇〇〇年まで務めた緒方貞子博士とセン博士を共同議長とする国連「人間の安全保障」委員会の運営を、二〇〇一年の設置当初から最終報告書『安全保障の今日的課題』（二〇〇三）の提出に至るまで全面的に支援した。その報告書の提言を受け、二〇〇六年までに、すでに一〇〇以上の案件を実施している。

(14) 浜本によれば、文化相対主義は、一見、普遍主義に対立し正反対の立場に見えるが、実は西洋の普遍主義のいわば双子の弟のようなものであるという。普遍主義が単一の全体性を夢見て突き進むのに対して、相対主義は自らの世界を相対化することを通じて、他者の世界をひとつのシステムとして眺めることのできる地平を構築しようとする。いずれも他者、すなわち自他の差異に取り惑かれ、自他の差異を包摂するような土台を希求し、狭隘な自文化中心主義への絶えざる懐疑と批判を基本姿勢としているのである（浜本：1996）。

(15) 中村をはじめ、ペシャワールやアフガニスタンの現場で働く者たちは、日本に帰って現地の実情をいくら語っても、それが得体の知れぬフィルターにかけられて、理解を得るのが困難であるという問題に悩まされているという。似た体験をした多くの者は、「結局、日本では解ってもらえない」という諦めで口を閉ざすか、逆に、的外れな称賛に酔うか、的外れな批判で怒るかするだけだった。中村自身の率直な気持ちは、石のごとく沈黙していたいというものであったというが、にもかかわらず、中村が現地からの積極的な発信を続けたのは、「現地事業が拡大し、せめてそれを日本側から真剣に支えている人々に対しては、万分の一でも真実を伝えたかった。いや、一人の証人として伝えねばならなかった」という、説明責任の自覚である。しかし「同時にバタ臭い文

化人の論議や、軽々しい日本の国際化ブームは肌に合わず、またぞろ私の中で、せめて鬱憤ぐらい晴らしたいという気持ちが、むくむくと頭をもたげてくるからでもあった」ことを、率直に認めている(1993: 181-182)。

(16) 発足当初のペシャワール会は、中村医師の中高、大学時代の友人知人、福岡登高会の山仲間や教会の関係者など、個人的な友人たちを中心として支援の態勢が組まれていた。その最初期の頃に会を支援した早良区に住む主婦の富森は、「不幸をくいものにするジャーナリストやミショナリーたち、慈善をうりものにするキリスト教関係者に怒りを覚え、必ず罪悪感を覚えさせるような皮肉を述べて一矢を報いることにしています」という会報に掲載された中村医師の手紙を読み、胸をグサリと刺される思いがしたという。そして「一時帰国をされ、日本の中でヌクヌクと暮らしている私達を見て、再び過酷なペシャワールに単身赴任されていった中村医師の心中を思うとき、言い表すことの出来ない程のお詫びの気持ちで胸が一杯になってしまいます」と述べて、中村の活動に共感共苦する心情を率直に吐露している。講演や会報が、ペシャワールと福岡をしっかりと結び付けていることが分かる(『会報』No.10, 1986)。

(17) こうした批判の矢が放たれる元は、人間がそれぞれの文化のなかでより良い生を生きるには、どのような知識と倫理が、いかにして与えられるべきかに関して、学校教育を最上のものとする西洋近代の価値観に盲従しない、まさに文化相対主義にもとずく中村個人の信念である。たとえば、次のような言葉に、それが端的に示されている。「アフガニスタン人にはアフガニスタン人の生き方がある。… 教育というのは、何のためにあるのか。大きな柱は二つあると思う。生活していくための『技術の習得』と、人間としての徳というか、修養を積む『人間教育』である。生活していくための教育であれば、圧倒的に多い農民、遊牧民の子弟にとっては、家の手伝いをすることがそのまま技術教育になる。人間教育の面からいえば、金曜日ごとにモスク(イスラム教の礼拝所)に行き、一日五回のお祈りをして、人間として、〝していいこと〟と〝してはいけないこと〟の分別を身につけることこそ立派な人間教育となりうる。そういうことまで変える必要がはたしてあるのか、というのが私の素朴な疑問である。

(18) ただ結論部に相当する最後の段落のなかで、そうした周辺化された人々の研究は、多国籍企業や世界銀行などのグローバル・エージェントの介入に対抗して闘う「地域」の当事者や活動家に、ほとんど何の役にも立っておらず、だから彼らに情報を与え力となってゆくためには、具体的に何ができるだろうかという、中南米における先住権運動を研究しているダニエル・マトの問いかけを紹介するだけである。しかし、それが「決定的に重要な問いかけ」ではあるが、それに対する「完全な解答などをもちあわせてはいない」と認めている(*ibid.* 24)。

私が言いたいのは、無いものねだりをして、モーリス=鈴木の足らぬ部分をあげつらうことではない。ダニエル・マトの問いかけは私にも向けられており、私も答えられずに下を向くだけであることを認めなければならない。そのうえで、中村が人類学者や文化批評家ではなく、何よりも実践の人であることの重要性と、その実践にもとづく発言が、結果として人類学者の自文化批判や文化批評家の近代批判と同じことをしながら、現場の問題を凝視し熟考し、そこから発せられるものであるゆえに、一般の人々にも分かりやすく、かつ熱く力強いメッセージとなっている点を強調したいのである。

(19) 中村は、『会報』に載った日本人ワーカーの報告を集めた最新刊『丸腰のボランティア—すべて現場から学んだ』(二〇〇六)の

「まえがき」のなかで、ペシャワール会の現地活動は、グローバル化という時流に抗して行われてきたが、しかし「確固とした援助哲学」があったわけではなかった。しいて言えば「現地で遭遇する困った人々を見捨ててはおれなかったこと、現地の文化や価値観を尊重し、泣き笑いを共にしてきたことにあります」という。おそらく、ワーカーたちは、現地の人々との濃密な関係と交流のなかで、怒りや落胆も含めた喜怒哀楽の起伏の激しい感情をぶつけあい、分かち合ってきたのであろう。

中村とスタッフの現地の人々のなかに我が身を置き、共に活動するという現場主義は、そのまま、理念ばかりが高尚なものの実体が伴うことの少ない欧米の国際機関やNGOに対する辛らつな批判となっている。そうした組織の外国人スタッフは、ほとんど現場にゆくことがないばかりか、「旱魃であえぐ人々を尻目に、娯楽用プールを作ったり、毎晩ワイン・パーティをしたり」して、現地の人々の顰蹙と反感を買っていた。そのため、二〇〇五年五月に「米兵がコーランを破ってトイレに捨てた」というニュースがきっかけで生じた暴動によって、ジャララバードにある事務所や宿舎を襲撃され、外国人の多くが緊急の飛行機で脱出を余儀なくされた。しかし、ペシャワール会の事務所は襲われることなく、スタッフは、一日だけ様子をみた後、平常の作業のために現場に戻ったのである（中村　2006: 133）。

(20) 中村自身もまた、同様の事実を具体的に指摘している。国際的に名だたる組織が、丸投げ請負で事業を進めた結果、手抜き工事どころか、ポンプだけ設置して外観は立派でも殆ど掘削してない詐欺まがいのものであったという。たとえば千万円をかけて井戸ポンプを二〇本配布したというプロジェクトが、実は水汲みポンプ一セットが一万八千円なので、実費は三六万円のはずであり、残りは間接経費で消えとのだろう、という（2001: 98-99）。

(21) そのような苦労と苦難を乗り切って、一九九八年四月には建物が七割方完成して、引越しと開院式を盛大に開くことができた。一九九七年五月に土地を買収し、下旬に着工し、最終仕上げや技術面で大切なところは、中村自身が出て行って、現場で監督し、時に陣頭指揮を執り、一年間で完遂したのである。敷地が二千坪、建坪が千坪で、地下一階地上二階、総大理石の床（木材よりも安価）でできた七〇床を有する大病院の建設費は日本円で七千万円、ちょっと豪華なマンションを都心で買えるだけの金額であった。

(22) 三題話ではないけれど、三つのトピックを挙げて何事かを語るのは、説得的に論を述べる方便として使いやすい論法である。たとえば近年では、御厨（二〇〇六）が小泉元総理の政治手法について、「説得しない、調整しない、妥協しないという「三無主義」を貫いてきたニヒリスト首相」と評している。

(23) 中村を派遣したJOCS（日本キリスト教海外医療協力協会）は、受け入れ先を現地のキリスト教団体に限定し、「人だけを送って物や金は送らない」方針のため、中村医師と家族の渡航費と生活費のみを支給するだけで、活動に必要な資金や物資は一切用意しなかった。しかも派遣されたペシャワール・ミッション病院のらい病棟には、ねじれたピンセット数本と耳にはめると怪我をする聴診器一本のほかには、まともな注射器さえなく、「包帯まきの安宿」あるいは「野戦病院」のようであったという。ゼロからの出発どころか、「マイナスからの出発」を余儀なくされたのである。そのため、彼の活動を支援するペシャワール会が組織された。（中村　2006: 29-32）

(24) 中村の実践と思想に直接に触れるためには本書が簡便で最適の入門書となるだろう。

(25) また丸山は、「間が鳴る」と題した一章をもうけて、ペシャワールへのそもそもの関わりと、その関与の深化の経緯や背景について中村との問答を紹介しながら考察している。「間が鳴る」とは、禅の教えに言う金言であり、寺の鐘が鳴るのは、撞木（鐘を打つ吊り棒）が鐘を打つときだけである。鐘を「状況」に、撞木を人間の「意志」にそれぞれ置き換えてみれば、人間が事を成そうとするときの動機は、目前の状況がそうさせるのか、それとも人間の意志がそうさせるのか、どちらか一方だけとは言えない。ほとんどの場合、外部の状況と個人の内面とが「合致」して、何事かが生まれ始まる。それがまさに「間が鳴る」ことであり、中村の活動の始まりも、そのように理解できるであろうという（丸山 : 64-65）。

(26) そして「制約とは、個々人が置かれた時間と空間、生まれつきの身体的性質、容貌、性格、社会的関係、時代、民族、居住環境、貧富―要するに個々の人間を規定する大小の定め、そして時にダイナミックに変化もする状況の一切である」と説明する。

(27) その目線の低さ、他者の痛みへの共感は、生きる他者のみならず、「死者のまなざし」をも痛切に感知し、誠実に応答しようとする。たとえば、中村が診療所を開設した、ダラエ・ヌールからダラエ・ピーチーヌーリスタンのワマへと向かう途中のクナール州ケララ村は、一九八〇年にゲリラを匿っているとされてソ連軍＝政府軍に包囲され、老若男女を問わずに千五百人あまりが無差別に虐殺された。その虐殺をつぶさに知るに至った中村は、「アフガニスタン」に関わった全ての者、武器を供与して戦争をあおった者はもちろん、人道的支援で喝采を受けた外国人やアフガニスタンを語ったジャーナリスト・評論家、すなわち死者を踏み台にして生きた者は、皆、このケララ村の墓標、すなわち「死者のまなざし」に戦慄すべきであると糾弾する。そして中村自身もまた「死者のまなざしに脅えるもののひとり」であり、目前で展開されたこれらの事実を、軽々と器用に総括することができないが、しかし、今、生者の破局的な営み、死の力の跳梁を全世界に見るとき、犠牲者になり代わって、『自覚なき生者の驕り』を伝えずにはおれない」と述べている（『会報』No.41, 1994）。

さらに中村は、撲滅を目指して戦っているらい菌に対しても、次のように述べて、ある種の親近感を示している。らい菌は、何も好き好んで極東の小島の日本に渡ってきた訳ではないだろうし、中村も好き好んでらい菌退治のために彼らの故地に乗り込んできた訳でもない。だから、試薬で「真っ赤に美しく染まるらい菌を顕微鏡で覗いていると『二〇〇〇年来の人類の仇敵』とはどうしても思えない。らい菌にしてみれば迷惑千万な話で、らい菌を広めたのがヒトならば、これを撲滅するのもヒトである。…らい菌も私も、ヒトによって運命的に戦わされ、踊らされる（1999: 30, 2003a : 209）。」自己中心／自文化中心／人間中心的な物の見方、考え方を、ふっと離れた時、それまでの常識とは違った風に世界を見直し、内省や現状の批判へと至るのは、中村の発想法のひとつの特徴でもある。

(28) 中村は、すでに一九九三年に、ペシャワール会が堅持するのは、あくまでも現地を中心に活動を展開することであって、「国内活動は現地活動に従属する」ことを述べた後、九州とペシャワール・アフガニスタンしか知らないので、その活動が「国際協力」などと考えたことはないし、「一般的な国際協力論など大言壮語はしない」と明言している（1993b: 207-208）。

(29) そうしたエピソードを紹介した後で、丸山は中村を評して、「愚直なまでのひとの良さ。本質を喝破する怜悧な目。病苦を捨て

置けない良医の鑑。もしくは、不潔で、ずぼらで、こまやかな心遣いなどできない無骨な男――。これらはすべて、中村に当てはまる言葉である」と述べている。ただし、不潔さに関しては、中村の名誉のために、「実際はひと風呂浴びないと眠れないくらい清潔ずきだが、さえない風貌でそう見える」と付け加えている（丸山：77）。

(30) 私の父親は、自身ではリベラルと思いつつ、実際には、家父長という言葉がぴったり当てはまるような古い発想にとらわれた人物であった。横須賀で生まれ育った私は、近くにある米軍基地（進駐軍と呼んでいた）があたかも存在しないかのように、アメリカとは一切関わりなく生きることがまっとうな日本人であると思い込んでいた。周囲の大人たちは、アメリカ人と直接に接し英語を話せる人間、具体的にパンパン（米兵相手のバーのホステス）やオンリーさん（米兵の愛人あるいは囲い者）や通訳は、金銭的物質的には豊かであっても（チョコレートや洋酒洋モクの入手のしやすさ）、人間的には魂や体を売り渡した節操のない人間と苦々しく思っていた。もちろんそれは、豊かさへの羨望と嫉妬の裏返しであり、やせ我慢をするための矜持の支えであった。そうした地域の雰囲気あるいは常識のゆえ、私自身も英語とアメリカに対して屈折した気持ちを抱き続けた。英語は大学受験のために学ぶ必要悪に過ぎないと考えて勉強はしたものの、大学院でフィリピンに留学した後も、英語を素直に話すことができずに苦労した。

私自身、中村と同じく、小学校時代の夏休みには横須賀の山でカブトムシやクワガタムシの採集に熱中し、高学年には生物部に入ったが、蝶や虫を追いかけて人生が変わる出会いをすることもなかった。また私も、中村が多感な中学時代を送り藤井健児牧師から多大な感化を受けた西南学院と同じ、バプティスト派のミッション・スクールである関東学院で小中高と学び、毎朝の礼拝に参加して聖書を読み、賛美歌を歌ったが、結局、洗礼を受けることはなかった。学院の創立者で内村鑑三の弟子であったという坂田祐が定めた校訓は、「人になれ奉仕せよ」であり、奉仕の精神の大切さを教えられたが、しかし世のため人のために直接役に立つ仕事はしてこなかった。

なお「物語的理解」に関して、中村自身は、人は往々にして、現在という「結果」だけからものを見て、いかにもそれらしいシナリオを作るが、現実はそんな美談や大げさなことではなく、偶然と縁が重なったに違いない、強いていうならば、「医者の仁義がそうさせた」と述べている（丸山：80）

(31) 古い人間に関連して、中村は次のようにも語っている。「私はおそらく骨の髄まで日本人であって、恩義や義理だのという古臭い観念から抜けきれない。（1999: 136）」

(32) 中村を支える福元もまた、九州人の自覚を持ち、石風社とペシャワール会が九州にあったからこそ、地に足のついた息の長い活動ができたとして、次のように語っている。もし、会が東京にあったら、才気のある論客がいろんな意見を言いあい、「結局、議論が物事を決めていき、肝心の現地の感覚と噛み合わなくなり、たぶん空中分解したんじゃないでしょうか。…石風社は総勢三人の小さな出版社である。小さくて良かったと思う。東京になくて良かったと思う。」（福元：26, 70）

(33) 父親の薫陶のたまものか、中村自身もまた、赴任した当初の一九八八年の秋に、二人の子供が通うペシャワールのインターナショナル・スクール小学校が、アメリカン・クラブと提携して、ハローウィンの仮装行列を派手に行おうとしたとき、その繊細さを欠く唯我独尊ぶりに腹を立てて子供に八つ当たりしたエピソードを紹介している。親の厳命で米兵が投げ捨てるチョコレートやチュー

インガムを拾って食えなかった胃袋の恨みか、屈折したナショナリズムのせいか、家で仮装の準備をしている子供に対して、ついカッとなって「ヤンキーの猿まねをして地元の人間を馬鹿にするな」と怒鳴りつけてしまったという(1993b: 232)。

(34) 『花と龍』は、藤田進(一九五四)、石原裕次郎(一九六二)、中村錦之助(一九六五)、高倉健(一九六九)、渡哲也(一九七三)ら当代の人気俳優を主演に迎えて五回も映画化されるほどの大衆人気を得た実録小説である。作者の火野葦平(玉井勝則)は、小説のなかにも実名で登場している金五郎の長男であり、出生前日に書き上げた『糞尿譚』(一九三八)によって第六回芥川賞を受賞した。応召中のために授賞式は戦地で行われたが、その文才を認められて、陸軍報道部に転属となり、中国各地の前線を転戦して、『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』(一九三八-三九)の兵隊三部作を発表した。その爆発的人気によって、一躍「国民的英雄」となったが、戦後は、逆に戦意高揚の道具に使われたとして、左翼活動家やアメリカ占領軍などによって「戦争協力者」と激しく糾弾され、一時は執筆も禁止された。再びペンを執り、「戦争」の意味を問い続け、戦後の混乱期を描く『革命前後』を執筆した後、突然のように自決して果てた。繊細な詩人の魂と、戦争の影との相克に苛まれ、ひとつのことに命をかけた後には器用に変身や転進できぬまま、自分の体験を一〇年かけて反芻整理し、戦争を否定し、自身を否定して自殺した火野に、中村は親戚の叔父という以上に、一人の作家、「愚直で不器用」な人間として強い共感と敬愛の念を示している(中村 2006b: 58-61)。

(35) 配布の途中で北部同盟がカブールを占領したが、それでも配布を続け、カブールやジャラバードの被災民を中心に配った小麦の総計は一、四〇〇トンに達する。命の基金に寄せられた浄財は七億六、五〇〇万円にのぼり、その資金が緑の大地計画を可能とした(中村 2004: 36)。中村のそうした活動を評して、ワーカーのひとりが、『医者井戸を掘る』の後には、『医者川を掘る』、さらに『医者芋を掘る』を出版して三部作としたらいかが、との冗談を言い、中村も面白がって話しが盛り上がったというエピソードを紹介している(『会報』No.77, 2003)。

(36) 井戸掘りや用水路事業の際に注目すべきは、経費を切り詰めて安く上げることと、事業の完成後に現地の人々自身が容易に維持管理をできることを目的として、先にも述べた現地主義をここでも貫いたことである。具体的には資材と労働力を現地で調達し、現地に伝わる知識と技術を最大限に活用した。現地の人々を雇うことによって就業機会を提供し、貴重な現金収入の手段を提供したのである。それにアフガニスタンでは、樹木が少ないために石材の方が木材よりも値段が安く、現地の男たちは石を用いて家を作るなど、生まれながらの石工であるため、井戸掘りや用水路建設などの際の石壁作りは手馴れたものであった。

井戸掘りの際に、欧米のNGOは効率を重視してボーリング機械を導入したが、小は沢庵石から大は牡牛ほどもある巨大で硬い玉石の層に阻まれてそれ以上に掘り進むことができなかった。それに対して、ペシャワール会では、風の学校の中屋の助言を入れて、手掘りで作業を進め、結果として巨礫層も突破して地下水脈まで達することができ、新しい井戸の設置と古い井戸の改修を合わせて千本以上の井戸で水を確保した。「ツルハシとシャベルが機械力を圧倒し、亀が兎を追い抜いた」わけである。玉石の層を掘り進むには岩に穴を開けダイナマイトを爆発させて粉砕するが、その作業は、ゲリラとしてジハードに参加し、爆発物の取り扱いに慣れた男が、埋設地雷や不発弾から取り出した火薬を転用して、巧みにやり遂げていった。また、掘り出した石や土砂を地上に取り出すためには、伝統的な水汲み用の釣瓶「チャルハ」(木製)を鉄製に改良して活用した。ボーリングをはじめとして、外

部のアイデアや技術は、あまり役に立たず、伝統知識と技術がもっとも役に立ったのである（中村　2001: 36-71）。

(37) 帰国した中村が眼にしたのは、「タリバンの圧制から解放され、北部同盟の進駐を歓呼して迎える市民たち。ブルカを脱ぐ女性たちの姿」であり、それらの映像が嫌というほど流されたが、すべては錯覚であったという。タリバンがカブールを制圧したときにも市民は歓呼して迎え入れ、中村もその場に居合わせたが、勝った側を官軍として歓迎することは、「争いません」という意思表示以上のものではなく、地域によっては、カルザイ政権、北部同盟、タリバンのそれぞれの旗が並んで立てられていたという（中村　2006b: 94）。

リアルタイムでも、タリバンが整然と撤退した後の地方の無政府・無秩序状態について、中村は一一月二九日に、以下のような的確な報告をしている。「一一月一三日の北部同盟カーブル進駐以来、カーブルを除く全アフガニスタンで治安が急速に悪化。各国の救援団体、ＷＦＰ（世界食糧計画）、国連組織は、カーブル市以外の地域で困難に直面している。…東の最大の町ジャララバードでは、一一月一五日から「防衛隊長」ハザラット・アリ率いる北部同盟軍民が闊歩し、私たちＰＭＳとＤＡＣＡＡＲ（デンマーク救援会）以外の全ての外国団体、国連系の事務所が略奪された。治安は最悪である（中村　2004: 311-312）。」

(38) 積極的に匿うというよりも、アメリカがいまだビンラディンを捕縛できていないように、地域ごとのジルカ（長老会議）の協議にもとづくタリバンの政権もまた、ビンラディンの身柄を拘束する能力を有さなかったというのが正確であろう。

(39) あるいは看護部長の藤田は、一緒に病院で働いているアフガニスタン人スタッフにタリバンのことを尋ねたところ、相手は、「最もスタッフが嫌がるのは、暑い中顔中の髭を伸び放題にしなければならないのを強制されることです」と答えて苦笑いしたが、しかし、タリバン政権がまったくの悪であるとは言わないと報告している。別のスタッフは、タリバンの背後にはパキスタンがいることを非難しても悪の権化であるようなことは言わず、日本で報道されていることが実態とかけ離れていて、逆に空恐ろしく感じられるという（『会報』No.69, 2001）。

(40) 長倉以外にも、たとえば、一九九五年より国連本部政治局でアフガン問題を担当し、メスティリからブラヒミに至るまで、四代にわたる国連事務総長特別代表に補佐官として仕えた川端が、同様なタリバン評価を下している。氏は、アフガニスタン問題の背景（超大国や周辺国の独善的な政策や国際社会の事なかれ主義）と国連による平和活動の経緯を詳細に報告し解説しているが、タリバンについては、「アフガニスタン土着の宗教運動ではないし、その統治の形態や政策も、同国の伝統や文化とは異質のもの」であり、「一般国民にとって、タリバンが達成した秩序とは、極端な女性差別など、広範な人権侵害と圧制の上に築かれたものであり、明日への希望を否定する『墓場の平和』と呼ぶしかない状況であった」と断罪している（川端　2002: 166-167）。やはり、ここでも「一般国民」とは誰かが問われておらず（おそらくは国連職員と英語で語り合う西欧化したインテリや都市市民を自明視としているようだ）、西欧的な基準でアフガンニスタンの慣行を女性差別や人権侵害としている。

(41) 実際、用水路の建設現場では、二〇〇三年一一月二日に、突然米軍のヘリ二機が上空を旋回して機銃掃射を加えてきたという（中村　2004: 97）。

(42) そう信じる根拠は、アフガニスタンの情勢に関する膨大な情報の客観的分析ではなく、中村医師の二〇年あまりにわたる活動の

一貫性と人間としての信頼である。

(43) また、二〇〇年におよぶ取材にもとづき、タリバン台頭の背景について詳細な報告レポートを書いているラッシドも中村と同様なマスード評価をしている。「マスードは最も輝いた軍司令官の一人で、…約二万人のマスード軍の将兵たちは、かれを崇拝し、その権威は共産政権が崩壊した九二年、カブールを占領したときにピークに達した。…しかし、カブールで政権にあった四年間に、マスードの軍隊は商店からは盗み、民家に押し入るなど、市民を困らせる傲慢な支配者たちに代わった。だから市民たちは、タリバンがカブールに入ってきたとき、歓迎したのだった。…マスードは、優れた軍事戦略家だったが、政治家としての能力に乏しく…異なった民族グループや政党のあいだで政治同盟を築くのに失敗した(2000: 105-106)」

(44) 誰も行かぬところ、やらぬこと、しかも言葉よりも実践という理念に関して、中村は、ソ連軍と戦うアフガニスタン・ゲリラに加わった九州男児のエピソードを紹介している。中村が赴任した早々の一九八六年に家を訪れたTさんは、義侠心の塊のような人物で礼儀正しく、覚悟を決めてゲリラに投ずるところであった。その後、彼は弾の飛び交う前線にいて、二、三年経っても消息がなかったので、てっきり死亡したと思っていたら、ある日ぶらりとお礼に現れたという。その間、彼はまったく現地語をしゃべらず、たった一人の日本人として九州弁だけで荒くれパシュトゥ人ゲリラを数年率いていた。彼の事例は、日本人ワーカーの現地適応に手を焼いてきた中村の参考になったという(2003: 178-179)。

(45) この印象的なエピソードは、『少年マガジン』二〇〇三年二四号に掲載された「アフガニスタンで起こったこと」のなかで、迫真の絵とともに詳細に描かれている。(三枝義浩 二〇〇四に再録されている。)

(46) それ以前、九・一一同時テロの発生後の、一〇月一三日に衆議院テロ対策特別委員会に参考人として招致されたとき、テロという暴力に対する防止策として力で抑え込むことが自明の理のように議論されていることに異を唱えている。現地の対日感情、日本に対する信頼は絶大なものであるが、それが軍事行為によって損なわれる可能性があること、「難民支援」やNGOの保護を名目とする自衛隊の派遣による軍事プレゼンスによっても、信頼感が失われる危険性を懸念し、警鐘を鳴らしている(中村 2004: 28-34)。

(47) ただし、そうした日本への信頼と尊敬は、湾岸戦争の際に日本も「参戦」したことにより、宿敵米英の走狗であるという印象を与えてしまい、対日感情が悪化したという。(中村 2003a: 124, 2006a: 33)

(48) タリバン政権打倒後のアフガニスタンの治安回復と復興の道筋に関する議論について不思議に思うことがある。たとえば、『論座』二〇〇三年九月号の特集「アフガニスタンはどうなっているか」に、中村とともに寄稿している伊勢崎は、「軍閥の解体なくしてアフガニスタンの再生はない」という正論を述べている。彼は、アフガニスタン武装解除日本政府特別代表を務めており、その発言は一個人というよりも日本政府の見解と共通するものである。

彼によれば、国家建設と経済復興のためには、まず政権の安定と治安回復が何よりも必要であり、そのためには各地に割拠して武力衝突を繰り返す軍閥の武装解除を行い、部隊を解体しなければならない。暫定政権の国防省が把握するだけで九つの軍団規模の部隊があり、さらに、各軍団を構成する小・中部隊は、完全な忠誠心をもって指揮下に入ってはおらず、それぞれ非合法な徴税

や麻薬取引などによって資金を作り各地方に君臨している。それらの軍閥・部隊を武装解除させ、その後に安全を保障するためには「中立的抑止力」の存在が不可欠であるが、カルザイ政権の威信が及ぶのはカブールだけで、地方ではまったく知名度がない。カルザイ政権が依拠する三つの軍隊、すなわちＩＳＡＦ（国際治安支援部隊）、パンジシール閥の中央軍団、アメリカの支援で編成中の新国軍のいずれもがその能力を欠いている。アメリカ特殊部隊の空軍力だけがイメージとしての抑止力の役割を担っているが、武装解除の現場での抑止力を保障するものではなく、アメリカもそこまでコミットする意思を持っていない。

そのような窮状に際して、伊勢崎は、問題は武装解除が可能か否かではなく、武装解除なしでは一切の政治プロセスが進まないことをふまえ、必要条件の穴を埋めるためにすべての支援国が協力して最大限の努力をしなければならないという。具体的には、「完全に丸腰で、信頼醸成をくどいほどやる。住民自身の中に、『軍閥は嫌だ』『武器がある社会は嫌だ』というコンセンサスを作っていく。そして武器を持っている連中が差別されるような世論形成をしていく（:193-194）」ことを提案する。軍閥の武装解除が必要だと言い、しかしそれを実行するために必要な強制力が存在しないと認め、それでも実行する方法として丸腰で信頼醸成をやるべき、と提案する。至誠は天に通じることを信じる以外、論理的に矛盾した三段論法である。そもそも地方ごとに割拠する軍閥の武装解除を断行し、治安の回復と維持を実現したのがタリバン政権であった。さらには、タリバン政権の崩壊後に、丸腰の信頼醸成を地道に着実に行ってきたのが中村医師とペシャワール会であった。何か変である。